

蒲団

田山花袋

青空文庫

小石川の切支丹坂きりしたんざかから極楽水ごくらくすいに出る道のらだら坂を下りようとして渠かれは考えた。「これで自分と彼女との関係は一段落を告げた。三十六にもなって、子供も三人あって、あんなことを考えたかと思うと、馬鹿々々しくなる。けれど……けれど……本当にこれが事実だろうか。あれだけの愛情を自身に注いだのは単に愛情としてのみで、恋ではなかったらうか」

数多い感情づくめの手紙——二人の関係はどうしても尋常ではなかった。妻があり、子があり、世間があり、師弟の関係があればこそ敢て烈あえしい恋に落ちなかつたが、語り合う胸とどろきの轟、相見る眼の光、その底には確かに凄すさましい暴風あらしが潜んでいたのである。機会てつくに遭遇あしさえすれば、その底の底の暴風は忽たちまち勢を得て、妻子も世間も道德も師弟の関係も一挙にして破れて了しまうであろうと思われた。少くとも男はそう信じていた。それであるのに、二三日来のこの出来事、これから考えると、女は確かにその感情を偽り売つたのだ。自分を欺いたのだと男は幾度も思った。けれど文学者だけに、この男は自ら自分の心理を

客観するだけの余裕を有つていた。年若い女の心理は容易に判断し得られるものではない、かの温い嬉しい愛情は、単に女性特有の自然の発展で、美しく見えた眼の表情も、やさしく感じられた態度も都て無意識で、無意味で、自然の花が見る人に一種の慰藉を与えたようなものかも知れない。一步を譲つて女は自分を愛して恋していたとしても、自分は師かの女は門弟、自分は妻あり子ある身、かの女は妙齡の美しい花、そこに互に意識の加わるのを如何ともすることは出来まい。いや、更に一步を進めて、あの熱烈なる一封の手紙陰に陽にその胸の悶を訴えて、丁度自然の力がこの身を圧迫するかのように、最後の情を伝えて来た時、その謎をこの身が解いて遣らなかつた。女性のつつましやかな性として、その上に猶露わに迫つて来ることがどうして出来よう。そういう心理からかの女は失望して、今回のような事を起したのかも知れぬ。

「とにかく時機は過ぎ去つた。かの女は既に他人の所有だ！」

歩きながら渠はこう絶叫して頭髪をむしつた。

縞セルの背広に、麦稈帽、藤蔓の杖をつけて、やや前のめりにだらだらと坂を下りて行く。時は九月の中旬、残暑はまだ堪え難く暑いが、空には既に清涼の秋気が充ち渡つて、深い碧の色が際立つて人の感情を動かした。肴屋、酒屋、雑貨店、その向うに寺の

門みなきやら裏うら店の長屋ちややらが連つらつて、久堅ひさかた町の低い地まちには数多あまたの工場の煙筒えんとつが黒い煙を漲みなぎらしていた。

その数多い工場の一つ、西洋風の二階の一室、それが渠の毎日正午ひるから通う処で、十畳敷ほどの広さの室へやの中央まんなかには、大きい一脚テーブルの卓が据たえてあつて、傍に高い西洋風の本箱、この中には総すべて種々の地理書が一杯入れられてある。渠はある書籍会社の囑託を受けて地理書の編へん輯しゅうの手伝に従したがつていのである。文学者に地理書の編輯！渠は自分が地理の趣味を有あつていからと称おこして進んでこれに従事しているが、内心これに甘あまんじておらぬことは言うまでもない。後おくれ勝なる文学上の閱歴、断篇のみを作いまつて未だに全力の試みをする機会に遭遇せぬ煩はん悶もん、青年雑誌から月毎に受ける罵ば評ひょうの苦痛、渠かれ自みづからはその他日成ひじあるべきを意識してはいるものの、中心これを苦に病まぬ訳には行かなかつた。社会は日増ひましに進歩する。電車は東京市の交通を一変させた。女学生は勢力になつて、もう自分が恋をした頃のような旧式の娘は見たくも見られなくなつた。青年はまた青年で、恋を説くにも、文学を談ずるにも、政治を語るにも、その態度が総て一変して、自分等とは永久に相触れることが出来ないように感じられた。

で、毎日機械のように同じ道を通つて、同じ大きい門を入れて、輪転機いえうご関の屋を撼うごす音

と職工の臭い汗との交った細い間を通つて、事務室の人々に軽く挨拶して、こつこつと長い狭い階梯はしごを登つて、さてその室へやに入るのだが、東と南に明いたこの室は、午後の烈しい日影を受けて、実に堪え難く暑い。それに小僧が無精で掃除そうじをせぬので、卓の上には白い埃ほこりがざらざらと心地悪い。渠は椅子に腰を掛けて、煙草たばこを一服吸つて、立上つて、厚い統計書と地図と案内記と地理書とを本箱から出して、さて静かに昨日の続きの筆を執り始めた。けれど二三日来、頭脳あたまがむしゃくしゃしているので、筆が容易に進まない。一行書いては筆を留めてその事を思う。また一行書く、また留める、又書いてはまた留めるといふ風。そしてその間に頭脳に浮んで来る考は総て断片的で、猛烈で、急激で、絶望的の分が多い。ふとどういふ聯想れんそうか、ハウプトマンの「寂さびしき人々」を思い出した。こうならぬ前に、この戯曲をかの女の日課として教えて遣らうかと思つたことがあつた。ヨハネス・フォケラートの心事と悲哀とを教えて遣りたかつた。この戯曲を渠が読んだのは今から三年以前、まだかの女のこの世にあることをも夢にも知らなかつた頃であつたが、その頃から渠は淋さびしい人であつた。敢てヨハネスにその身を比そうとは為ななかつたが、アンのような女がもしあつたなら、そういう悲劇トラジディに陥るのは当然だとしみじみ同情した。今はそのヨハネスにさえなれぬ身だと思つて長嘆した。

さすがに「寂しき人々」をかの女に教えなかったが、ツルゲネーフの「ファースト」という短篇を教えたことがあった。洋燈ランブの光明あきらちかなる四畳半の書齋、かの女の若々しい心は色彩ある恋物語に憧れ渡つて、表情ある眼は更に深い深い意味を以て輝きわたった。ハイカラな庇ひさしがみ髪くし、櫛くし、リボン、洋燈の光線がその半身を照して、一卷の書籍に顔を近く寄せると、言うに言われぬ香水のかおり、肉のかおり、女のかおり——書中の主人公が昔の恋人に「ファースト」を読んで聞かせる段を講釈する時には男の声も烈しく戦ふるえた。

「けれど、もう駄目だ！」

と、渠は再び頭髪かみをむしった。

二

渠かれは名を竹中時雄と謂いった。

今より三年前、三人目の子が細君の腹に出来て、新婚の快樂などはとうに覚め尽きした頃であった。世の中の忙しい事業も意味がなく、一生ライフワーク作クに力を尽す勇氣もなく、日常の生活——朝起きて、出勤して、午後四時に帰つて来て、同じように細君の顔を見て、飯を食

つて眠るといふ單調なる生活につくづく倦き果てて了つた。家を引越歩いても面白くない、友人と語り合つても面白くない、外国小説を読み涉獵つても満足が出来ぬ。いや、庭樹の繁り、雨の点滴、花の開落などいふ自然の状態さえ、平凡なる生活をして更に平凡ならしめるような気がして、身を置くに処は無いほど淋しかった。道を歩いて常に見る若い美しい女、出来るならば新しい恋を為たいと痛切に思つた。

三十四五、實際この頃には誰にでもある煩悶で、この年頃に賤しい女に戯るるものが多いのも、畢竟その淋しさを医す為めである。世間に妻を離縁するものもこの年頃に多い。

出勤する途上に、毎朝邂逅う美しい女教師があつた。渠はその頃この女に逢うのをその日その日の唯一の楽しみとして、その女に就いていろいろな空想を逞うした。恋が成立つて、神楽坂あたりの小待合に連れて行つて、人目を忍んで楽しんだらどう……。細君に知れずに、二人近郊を散歩したらどう……。いや、それどころではない、その時、細君が懐妊しておつたから、不図難産して死ぬ、その後その女を入れるとしてどうであらう。……平気で後妻に入れることが出来るだらうかどうかなどと考えて歩いた。

神戸の女学院の生徒で、生れは備中の新見町で、渠の著作の崇拜者で、名を横山

芳子という女から崇拜の情を以て充された一通の手紙を受取ったのはその頃であつた。竹
 古城と謂えば、美文的小説を書いて、多少世間に聞えておつたので、地方から来る崇拜
 者かつうしや渴仰者の手紙はこれまでも随分多かつた。やれ文章を直してくれの、弟子でしにしてく
 れのと一々取合つてはいられなかつた。だからその女の手紙を受取つても、別に返事を出
 そうとまでその好奇心は募らなかつた。けれど同じ人の熱心なる手紙を三通まで貰もらつては、
 さすがの時雄も注意をせずにはいられなかつた。年は十九だそうだが、手紙の文句から推
 して、その表情の巧みなのは驚くべきほどで、いかなることがあつても先生の門下生にな
 つて、一生文学に従事したいとの切なる願望のぞみ。文字は走り書のすらすらしした字で、余程ハ
 イカラの女らしい。返事を書いたのは、例の工場の二階の室で、その日は毎日の課業の地
 理を二枚書いて止よして、長い数尺に余る手紙を芳子に送つた。その手紙には女の身として
 文学に携わることの不心得、女は生理的に母たるの義務を尽さなければならぬ理由、処女
 にして文学者たるの危険などを縷々るるとして説いて、幾らか罵倒ばとう的の文辞をも陳ならべて、これ
 ならもう愛想あいそをつかして断念あきらめて了しまうであろうと時雄は思つて微笑した。そして本箱の中
 から岡山県の地図を捜して、阿哲郡新見町の所在を研究した。山陽線から高梁川たかはしがわの谷
 を遡さかのぼつて奥十数里、こんな山の中にもこんなハイカラの女があるかと思つと、それでも何

となくなつかしく、時雄はその附近の地形やら山やら川やらを仔細しさいに見た。

で、これで返辞をよこすまいと思つたら、それどころか、四日目には更に厚い封書が届いて、紫インキで、青い罫けいの入った西洋紙に横に細字で三枚、どうか将来見捨てずに弟子にしてくれという意味が返す返すも書いてあつて、父母に願つて許可を得たならば、東京に出て、然しかるべき学校に入つて、完全に忠実に文学を学んでみたいとのことであつた。時雄は女の志に感ぜずにはいられなかつた。東京でさえ——女学校を卒業したものでさえ、文学の価値ねうちなどは解らぬものなのに、何もかもよく知っているらしい手紙の文句、早速返事を出して師弟の関係を結んだ。

それから度々たびたびの手紙と文章、文章はまだ幼稚な点はあるが、癖の無い、すらすらした、将来発達の見込は十分にあると時雄は思つた。で一度は一度より段々互の氣質が知れて、時雄はその手紙の来るのを待つようになった。ある時などは写真を送れと言つて遣やらうと思つて、手紙の隅すみに小さく書いて、そしてまたこれを黒々と塗つて了つた。女性には容色きりよと謂いうものが是非必要である。容色のわるい女はいくら才があつても男が相手に為ない。時雄も内々胸の中で、どうせ文学を遣らうというような女だから、不ふ容色きりよに相違ないと思つた。けれどなるべくは見られる位の女であつて欲しいと思つた。

芳子が父母に許可を得て、父に伴れられて、時雄の門を訪うたのは翌年の二月で、丁度時雄の三番目の男の児の生れた七夜の日であった。座敷の隣の室は細君の産褥で、細君は手伝に来てゐる姉から若い女門下生の美しい容色であることを聞いて少なからず懊惱した。姉もああいう若い美しい女を弟子にしてどうする気だろうと心配した。時雄は芳子と父とを並べて、縷々として文学者の境遇と目的とを語り、女の結婚問題に就いて予め父親の説を叩いた。芳子の家は新見町でも第三とは下らぬ豪家で、父も母も厳格なる基督教信者、母は殊にすぐれた信者で、曾ては同志社女学校に学んだこともあるという。総領の兄は英国へ洋行して、帰朝後は某官立学校の教授となつてゐる。芳子は町の小学校を卒業するとすぐ、神戸に出て神戸の女学院に入り、其処でハイカラな女学校生活を送つた。基督教の女学校は他の女学校に比して、文学に対して総て自由だ。その頃こそ「魔風恋風」や「金色夜叉」などを讀んではならんとの規定も出ていたが、文部省で干渉しない以前は、教場でさえなくば何を讀んでも差支なかつた。学校に附属した教会、其処で祈祷の尊いこと、クリスマス晩の面白いこと、理想を養うといふことの味をも知つて、人間の卑しいことを隠して美しいことを標榜するといふ群の仲間となつた。母の膝下が恋しいとか、故郷が懐かしいとか言うことは、来た当座こそ切実に辛く感じもし

だが、やがては全く忘れて、女学生の寄宿生活をこの上なく面白く思うようになった。旨味いし南^{かぼちゃ}瓜を食べさせないと云つては、お鉢^{はち}の飯に醬^{しょうゆ}油を懸^かけて、賄^{まかない}方を酷^{いじ}めたり、舎監のひねくれた老婦の顔色を見て、陰^{かげ}陽^{ひなた}に物を言つたりする女学生の群の中に入つていては、家庭に養われた少女のように、単純に物を見ることがどうして出来よう。美しいこと、理想を養うこと、虚栄心の高いこと——こういう傾向をいつとなしに受けて、芳子は明治の女学生の長所と短所とを遺憾なく備えていた。

すくな^{すくな} 尠くとも時雄の孤独なる生活はこれによつて破られた。昔の恋人——今の細君。曾^{かつ}ては恋人には相違なかつたが、今は時勢が移り變つた。四五年来の女子教育の勃^{ぼつ}興^{こう}、女子大学の設立、庇^{ひさし}髪^{がみ}、海老茶袴^{えびちやばかま}、男と並んで歩くのをはにかむようなものは一人も無くなつた。この世の中に、旧式の丸鬚^{まるまげ}、泥鴨^{あひる}のような歩き振、温順と貞節とより他^{ほか}に何物をも有せぬ細君に甘んじていることは時雄には何よりも情けなかつた。路^{みち}を行けば、美しい今^{いま}様^{よう}の細君を連れての睦^{むつま}じい散歩、友を訪えば夫の席に出て流^{りゅう}暢^{うちよう}に会話を賑^{にぎ}やかす若い細君、ましてその身が骨を折つて書いた小説を読もうでもなく、夫の苦悶^{くもん}煩悶には全く風馬牛で、子供さえ満足に育てれば好いという自分の細君に対すると、どうしても孤独を叫ばざるを得なかつた。「寂しき人々」のヨハンネスと共に、家妻というものの無意味

を感じずにはいられなかった。これが——この孤独が芳子に由つて破られた。ハイカラな新式な美しい女門下生が、先生！ 先生！ と世にも豪い人のように渴仰して来るのに胸を動かさずに誰がおられようか。

最初の一月ほどは時雄の家に仮寓していた。華やかな声、艶やかな姿、今までの孤独な淋しいかれの生活に、何等の対照！ 産褥から出たばかりの細君を助けて、靴下を編む、襟巻を編む、着物を縫う、子供を遊ばせるといふ生々した態度、時雄は新婚当座に再び帰つたような気がして、家門近く来るとそるるように胸が動いた。門をあけると、玄關にはその美しい笑顔、色彩に富んだ姿、夜も今までは子供と共に細君がいぎたなく眠つて了つて、六畳の室に徒に明らかな洋燈も、却つて侘しさを増すの種であつたが、今は如何に夜更けて帰つて来ても、洋燈の下には白い手が巧に編物の針を動かして、膝の上に色ある毛糸の丸い玉！ 賑かな笑声が牛込の奥の小柴垣の中に充ちた。

けれど一月ならずして時雄はこの愛すべき女弟子をその家に置く事の不可能なのを覺つた。従順なる家妻は敢てその事に不服をも唱えず、それらしい様子も見せなかつたが、しかもその気色は次第に悪くなった。限りなき笑声の中に限りなき不安の情が充ち渡つた。妻の里方の親戚間などには現に一問題として講究されつつあることを知つた。

時雄は種々に煩悶した後、細君の姉の家——軍人の未亡人で恩給と裁縫とで暮している姉の家に寄寓させて、其処から麴町の某女塾に通学させることにした。

三

それから今回の事件まで一年半の年月が経過した。

その間二度芳子は故郷を省した。短篇小説を五種、長篇小説を一種、その他美文、新体詩を数十篇作つた。某女塾では英語は優等の出来で、時雄の選択で、ツルゲネーフの全集を丸善から買った。初めは、暑中休暇に帰省、二度目は、神経衰弱で、時々癩のような瘡癩を起すので、暫し故山の静かな処に帰つて休養する方が好いという医師の勧めに従つたのである。

その寓していた家は麴町の土手三番町、甲武の電車の通る土手際で、芳子の書齋はその家での客座敷、八畳の間、前に往来の頻繁な道路があつて、がやがやと往来の人やら子供やらで喧しい。時雄の書齋にある西洋本箱を小さくしたような本箱が一閑張の机の傍にあつて、その上には鏡と、紅皿と、白粉の罎と、今一つシユウソカリの入つた大

きな糧がある。これは神経過敏で、頭脳が痛くつて為方が無い時に飲むのだという。本箱には紅葉全集、近松世話浄瑠璃、英語の教科書、ことに新しく買ったツルゲネーフ全集が際立つて目に附く。で、未来の閨秀作家は学校から帰つて来ると、机に向つて文を書くというよりは、寧ろ多く手紙を書くので、男の友達も随分多い。男文字の手紙も随分来る。中にも高等師範の学生に一人、早稲田大学の学生に一人、それが時々遊びに来たことがあつたそうだ。

麴町土手三番町の一角には、女学生もそうハイカラなのが沢山居ない。それに、市ヶ谷見附の彼方には時雄の妻君の里の家があるのだが、この附近は殊に昔風の商家の娘が多いで、少くとも芳子の神戸仕込のハイカラはあたりの人の目を聳たしめた。時雄は姉の言葉として、妻から常に次のようなことを聞される。

「芳子さんにも困つたものですねと姉が今日も言っていましたよ、男の友達が来るのは好いけれど、夜など一緒に二七（不動）に出かけて、遅くまで帰つて来ないことがあるんですつて。そりや芳子さんはそんなことは無いのに決っているけれど、世間の口が喧しくつて為方が無いと云っていました」

これを聞くと時雄は定つて芳子の肩を持つので、「お前達のような旧式の人間には芳子

の遣ることなどは判りやせんよ。男女が二人で歩いたり話したりさえすれば、すぐあやしいとか変だとか思うのだが、一体、そんなことを思ったり、言ったりするのが旧式だ、今では女も自覚しているから、為ようと思うことは勝手にするさ」

この議論を時雄はまた得意になつて芳子にも説法した。「女子ももう自覚せんければいかん。昔の女のように依頼心を持つていては駄目だ。ズウデルマンのマグダの言つた通り、父の手からすぐに夫の手に移るような意気地なしでは為方が無い。日本の新しい婦人としては、自ら考えて自ら行うようにしなければいかん」こう言つては、イブセンのノラの話や、ツルゲネーフのエレネの話や、露西亞、独逸あたりの婦人の意志と感情と共に富んでいることを話し、さて、「けれど自覚と云うのは、自省ということをも含んでおるですかな、無闇に意志や自我を振廻しては困るですよ。自分の遣つたことには自分が全責任を帯びる覚悟がなくては」

芳子にはこの時雄の教訓が何より意味があるように聞えて、渴仰の念が愈々 《いよいよ》 加わつた。基督教の教訓より自由でそして權威があるように考えられた。

芳子は女学生としては身装が派手過ぎた。黄金の指環をはめて、流行を趁つた美しい帯をしめて、すつきりとした立姿は、路傍の人目を惹くに十分であつた。美しい顔と云うよ

りは表情のある顔、非常に美しい時もあれば何だか醜い時もあつた。眼に光りがあつてそれが非常によく働いた。四五年前までの女は感情を顕あらわすのに極めて単純で、怒つた容かたちとか笑つた容とか、三種、四種位しかその感情を表わすことが出来なかつたが、今では情を巧に顔に表わす女が多くなつた。芳子もその一人であると時雄は常に思った。

芳子と時雄との関係は単に師弟の間柄としては余りに親密であつた。この二人の様子を観察したある第三者の女の一人が妻に向つて、「芳子さんが来てから時雄さんの様子はまるで変りましたよ。二人で話しているところを見ると、魂は二人ともあくがれ渡つていようで、それは本当に油断がなりませんよ」と言つた。他はたから見れば、無論そう見えたに相違なかつた。けれど二人は果してそう親密であつたか、どうか。

若い女のうかれ勝な心、うかれるかと思えばすぐ沈む。些ささい細なことに胸を動かし、つまらぬことにも心を痛める。恋でもない、恋でなくも無いというようなやさしい態度、時雄は絶えず思い惑つた。道義の力、習俗の力、機会一度至ればこれを破るのは帛きぬを裂くよりも容易だ。唯ただ、容易きたに來らぬはこれを破るに至る機会である。

この機会がこの一年の間に尠すくなくとも二度近寄つたと時雄は自分だけで思った。一度は芳子が厚い封書を寄せて、自分の不束ふつつかなこと、先生の高恩に報ゆることが出来ぬから自分

は故郷に帰つて農夫の妻になつて田舎いなかに埋れて了しまおうということを涙交りに書いた時、一度は或る夜芳子が一人で留守番をしているところへゆくりなく時雄が行つて訪問した時、この二度だ。初めの時は時雄はその手紙の意味を明かに了解した。その返事をいかに書くべきかに就いて一夜眠らずに懊惱おうれうした。穏かに眠れる妻の顔、それを幾度か窺うかがつて自己の良心のいかに麻痺まひせるかを自ら責めた。そしてあくる朝贈つた手紙は、厳乎げんこたる師としての態度であつた。二度目はそれから二月ほど経たつた春の夜、ゆくりなく時雄が訪問すると、芳子は白粉おしろいをつけて、美しい顔をして、火鉢ひばちの前にぽつねんとしていた。

「どうしたの」と訊きくと、

「お留守番ですの」

「姉は何処どこへ行つた？」

「四谷へ買物に」

と言つて、じつと時雄の顔を見る。いかにも艶なまめかしい。時雄はこの力ある一瞥いちべつに意気地なく胸を躍おどらした。二語三語、普通のことを語り合つたが、その平凡なる物語が更に平凡でないことを互に思い知つたらしかつた。この時、今十五分も一緒に話し合つたならば、どうなつたであろうか。女の表情の眼は輝き、言葉は艶なまめき、態度がいかに尋常よのつね

でなかった。

「今夜は大変綺麗きれいにしていますね？」

男は態わざと軽く出た。

「え、先程、湯に入りましたのよ」

「大変に白粉が白いから」

「あらまア先生！」と言って、笑って体を斜はすに嬌きょう態たいを呈した。

時雄はすぐ帰った。まア好いでしようと思つて芳子はたつて留めたが、どうしても帰ると言うので、名残惜なごりしげに月の夜を其処そこまで送つて来た。その白い顔には確かにある深い神秘が籠こめられてあつた。

四月に入つてから、芳子は多病で蒼あおしろい顔をして神経過敏に陥つていた。シユウソカリを余程多量に服してもどうも眠られぬとて困つていた。絶えざる欲望と生殖の力とは年頃の女を誘うのに躊躇ちゆうちよしない。芳子は多く薬に親しんでいた。

四月末に帰国、九月に上京、そして今回の事件こんどが起つた。

今回の事件とは他ほかでも無い。芳子は恋人を得た。そして上京の途次、恋人と相携えて京都嵯峨さかに遊んだ。その遊んだ二日の日数が出発と着京との時日に符合せぬので、東京と備

中との間に手紙の往復があつて、詰問した結果は恋愛、神聖なる恋愛、二人は決して罪を犯してはおらぬが、将来は如何にしてもこの恋を遂げたいとの切なる願望。時雄は芳子の師として、この恋の証人として一面月下氷人の役目を余儀なくさせられたのであつた。芳子の恋人は同志社の学生、神戸教会の秀才、田中秀夫、年二十一。

芳子は師の前にその恋の神聖なるを神懸けて誓つた。故郷の親達は、学生の身で、ひそかに男と嵯峨に遊んだのは、既にその精神の墮落であると云つたが、決してそんな汚れた行為はない。互に恋を自覚したのは、寧ろ京都で別れてからで、東京に帰つて来てみると、男から熱烈なる手紙が来ていた。それで始めて将来の約束をしたような次第で、決して罪を犯したようなことは無いと女は涙を流して言つた。時雄は胸に至大の犠牲を感じながらも、その二人の所謂神聖なる恋の為に力を尽すべく余儀なくされた。

時雄は悶えざるを得なかつた。わが愛するものを奪われたということ甚だしくその心を暗くした。元より進んでその女弟子を自分の恋人にする考は無い。そういう明らかな定つた考があれば前に既に二度までも近寄つて来た機会を攫むに於て躊躇するところは無い筈だ。けれどその愛する女弟子、淋しい生活に美しい色彩を添え、限りなき力を

添えてくれた芳子を、突然人の奪い去るに任ずに忍びようか。機会を二度まで攫むことは躊躇したが、三度来る機会、四度来る機会を待つて、新なる運命と新なる生活を作りたいたとはかれの心の底の底の微かなる願であつた。時雄は悶えた、思い乱れた。妬みと惜しみと悔恨との念が一緒になつて旋風のように頭脳の中を回転した。師としての道義の念もこれに交つて、益 《ますます》炎を熾んにした。わが愛する女の幸福の為めという犠牲の念も加わつた。で、夕暮の膳の上の酒は夥しく量を加えて、泥鴨の如く酔つて寝た。

あくる日は日曜日あしの雨、裏の森にざんざん降つて、時雄の為めには一倍に佻しい。櫛わびの古樹に降りかかる雨の脚、それが実に長く、限りない空から限りなく降つておるとしか思われぬ。時雄は読書する勇氣も無い、筆を執る勇氣もない。もう秋で冷々と背中の冷たい籐椅子とういすに身を横えつよこたつ、雨の長い脚を見ながら、今回の事件からその身の半生のことを考えた。かれの経験にはこういう経験が幾度もあつた。一步の相違で運命の唯中に入る事が出来ずに、いつも圏外に立たせられた淋しい苦悶くもん、その苦しい味をかれは常に味あじわつた。文学の側でもそうだ、社会の側でもそうだ。恋、恋、恋、今になつてもこんな消極的な運命に漂わされているかと思うと、その身の意気地なしと運命のつたないことがひしひしと胸に迫つた。ツルゲネーフのいわゆる Superfluous man だと思つて、その主人公の儂はかな

い一生を胸に繰返した。

寂寥さびしきに堪えず、午ひるから酒を飲むと言出した。細君の支度の為ようが遅いのでぶつぶつ言っていたが、膳のに載せられた肴さかながまずいので、遂ついにに癩かんしゃく癩くを起して、自棄やけに酒を飲んだ。一本、二本と徳利の数は重かさなつて、時雄は時の間に泥まの如く酔った。細君に対する不平ももう言わなくなつた。徳利に酒が無くなると、只、酒、酒と言うばかりだ。そしてこれをぐいぐいと呷あおる。気の弱い下女はどうしたことかと呆あきれて見ておつた。男の兎の五歳になるのを始めは頻しきりに可愛あひがつて抱ないたり撫なでたり接せつ吻ぶんしたりしていたが、どうしたはずみでか泣出したのに腹を立てて、ピシャピシャとその尻しつぽんを乱打したので、三人の子供は怖こわがつて、遠巻とんまきにして、平生ふだんに似もやらぬ父親の赤く酔った顔を不思議そうに見ていた。一升近く飲んでそのまま其処に酔倒れて、お膳とんぼの筋斗とんぼがえりを打つものにも頓とん着ちやくしなかつたが、やがて不思議なだらだらした節で、十年も前にはやった幼稚な新体詩を歌い出した。

君が門辺かどへをさまよふは

ちまたちりの塵ちりを吹き立つる

あらし
嵐あらしのみとやおぼすらん。

その嵐よりいやあれに

その塵よりも乱れたる

恋のかばねを暁の

歌を半ばにして、細君の被かけた蒲団ふとんを着たまま、すつくと立上つて、座敷の方へ小山の如く動いて行つた。何処へ？ 何処へいらつしやるんです？ と細君は気が気でなくその後を追つて行つたが、それにも関かまわず、蒲団を着たまま、廁かわやの中に入ろうとした。細君は慌あわてて、

「貴郎あなた、貴郎、酔つぱらつてはいやですよ。そこは手水場ちようずばですよ」

突いきなり如蒲団を後から引いたので、蒲団は廁の入口で細君の手に残つた。時雄はふらふらと危く小便をしていたが、それがすむと、突いきなりどう如 と廁の中に横に寝てしまった。細君が汚きたながつて頻しきりに揺ゆすつたり何かしたが、時雄は動こうとも立とうとも為なない。そうかと云つて眠つたのではなく、赤土のような顔に大きい鋭い目を明あいて、戸外おもてに降り頻しきる雨をじつと見ていた。

四

時雄は例刻をてくてくと牛込矢来町の自宅に帰つて来た。

渠は三日間、その苦悶と戦つた。渠は性として惑溺することが出来ぬ或一種の力を有つている。この力の為めに支配されるのを常に口惜しく思つてゐるのではあるが、それでもいつか負けて了う。征服されて了う。これが為め渠はいつも運命の圏外に立つて苦しい味を嘗めさせられるが、世間からは正しい人、信頼するに足る人と信じられている。三日間の苦しい煩悶、これでとにかく渠はその前途を見た。二人の間の關係は一段落を告げた。これからは、師としての責任を尽して、わが愛する女の幸福の為めを謀るばかりだ。これはつらい、けれどつらいのが人生だ！と思ひながら帰つて来た。

門をあけて入ると、細君が迎えに出た。残暑の日はまだ暑く、洋服の下襦袢がびつしより汗にぬれている。それを糊のついた白地の単衣に着替えて、茶の間の火鉢の前に坐ると、細君はふと思ひ附いたように、筆筒の上の一封の手紙を取出し、

「芳子さんから」

と言つて渡した。

急いで封を切つた。巻紙の厚いのを見ても、その事件に關しての用事に相違ない。時雄

は熱心に読下した。

言文一致で、すらすらとこの上ない達筆。

先生――

実は御相談に上りたいと存じましたが、余り急でしたものでしたから、独断で実行致しました。

昨日四時に田中から電報が参りまして、六時に新橋の停車場に着くとのことですので、私はどんなに驚きましたか知れません。

何事も無いのに出て来るような、そんな軽率な男でないと信じておりますだけに、一層甚しくはなはだ氣を揉もみました。先生、許して下さい。私はその時刻に迎えに参りましたのです。逢あつて聞きますと、私の一伍一いちぶしじゅう一いちを書いた手紙を見て、非常に心配して、もしこの事があつた為め万一郷里に伴つれて帰られるようなことがあつては、自分が済まぬと言うので、学事をも捨てて出京して、先生にすっかりお打明申して、お詫わびも申上げ、お情にもすが縋すがつて、万事円満に参るようにと、そういう目的で急に出て参つたのことで御座います。それから、私は先生にお話し申した一伍一いちぶしじゅう一いち、先生のお情深い言葉、将来までも私等二人の神聖な真面目まじめな恋の証人とも保護者ともなつて下さるとい

うことを話しましたところ、非常に先生の御情に感激しまして、感謝の涙に暮れまして次第で御座います。

田中は私の余りに狼狽ろうばいした手紙に非常に驚いたとみえまして、十分覚悟をして、万一破壊の暁にはと言った風なことも決心して参りましたので御座います。万一の時にはあの時嵯峨さかと一緒に参った友人を証人にして、二人の間が決して汚れた関係の無いことを弁明し、別れて後互に感じた二人の恋愛をも打明けて、先生にお縋り申して郷里の父母の方へも逐ちくいち一言つて頂こうと決心して参りましたそうです。けれどこの間の私の無謀で郷里の父母の感情を破っている矢先、どうしてそんなことを申して遣つかわされましょう。今は少時しばらく沈黙して、お互に希望を持って、専心勉強に志し、いつか折を見て——或は五年、十年の後かも知れませんが——打明けて願う方が得策だと存じまして、そういうことに致しました。先生のお話をも一切話して聞かせました。で、用事が済んだ上は帰した方が好いのですけれど、非常に疲れている様子を見ましてはさすがに直ちに引返すようにとも申兼ねました。（私の弱いのを御許し下さいまし）勉強中、実際問題に触れてはならぬとの先生の御教訓は身にしみて守るつもりで御座いますが、一先、旅籠屋はたごやに落着かせまして、折角出て来たものですから、一日位見

物しておいでなさいと、つい申してしまいました。どうか先生、お許し下さいまし。私共も激しい感情の中に、理性も御座いますから、京都でしたような、仮りにも常識を外れた、他人から誤解されるようなことは致しません。誓って、決して致しません。末ながら奥様にも宜しく申上げて下さいまし。

芳子

先生 御もと

この一通の手紙を読んでいる中、さまざまの感情が時雄の胸を火のように燃えて通った。その田中という二十一の青年が現にこの東京に來ている。芳子が迎えに行つた。何をしたか解らん。この間言つたこともまるで虚言うそかも知れぬ。この夏期の休暇に須磨すまで落合つた時から出來ていて、京都での行為もその望を満す為め、今度も恋しさに堪たえ兼ねて女の後を追つて上京したのかも知れん。手を握つたろう。胸と胸とが相触れたらう。人が見ていぬ旅籠屋の二階、何を為ているか解らぬ。汚れる汚れぬのも刹那せつなの間だ。こう思うと時雄は堪たまらなくなつた。「監督者の責任にも関する！」と腹の中で絶叫した。こうしてはおかれぬ、こういう自由を精神の定まらぬ女に与えておくことは出來ん。監督せんければなら

ん、保護せんけりやならん。私共は熱情もあるが理性がある！ 私共とは何だ！ 何故私とは書かぬ、何故複数を用いた？ 時雄の胸は嵐あらしのように乱れた。着いたのは昨日の六時、姉の家に行つて聞き糺ただせば昨夜何時頃に帰つたか解るが、今日はどうした、今はどうしている？

細君の心を尽した晚餐ばんさんの膳ぜんには、鮪まぐろの新鮮な刺身に、青紫蘇あおしその薬味を添えた冷豆腐ひややつこ、それを味う余裕もないが、一盃いっばいは一盃と盞さかずきを重ねた。

細君は末の児を寝かして、火鉢の前に来て坐つたが、芳子の手紙の夫の傍にあるのに眼を付けて、

「芳子さん、何て言つて来たのです？」

時雄は黙つて手紙を投げて遣やつた、細君はそれを受取りながら、夫の顔をじろりと見て、暴風の前に来る雲行の甚だ急なのを知つた。

細君は手紙を読終つて巻きかえしながら、

「出て来たのですね」

「うむ」

「ずっと東京に居るんでしょうか」

「手紙に書いてあるじゃないか、すぐ帰すツて……」

「帰るでしようか」

「そんなこと誰が知るものか」

夫の語気が烈しいので、細君は口を噤んで了った。少時経ってから、

「だから、本当に厭き、若い娘の身で、小説家になるなんぞツて、望む本人も本人なら、よこす親達も親達ですからね」

「でも、お前は安心したろう」と言おうとしたが、それは止して、

「まあ、そんなことはどうでも好きさ、どうせお前達には解らんのだから……それよりも酌でもしたらどうだ」

温順な細君は徳利を取上げて、京焼の盃に波々と注ぐ。

時雄は頻りに酒を呷った。酒でなければこの鬱を遣るに堪えぬといわぬばかりに。三本目に、妻は心配して、

「この頃はどうか為ましたね」

「何故？」

「酔ってばかりいるじゃありませんか」

「酔うということがどうかしたのか」

「そうでしよう、何か気に懸ることがあるからでしょう。芳子さんのことなどはどうしても好いじゃありませんか」

「馬鹿！」

と時雄は一喝かつした。

細君はそれにも懲りずに、

「だって、余り飲んで毒ですよ、もう好い加減になさい、また手水場ちようずばにでも入って寝ると、貴郎あなたは大きいから、私と、お鶴（下女）の手ぐらいではどうにもなりやしませんからさ」

「まア、好いからもう一本」

で、もう一本を半分位飲んだ。もう酔は余程廻つたらしい。顔の色は赤銅色しゃくどういろに染つて眼が少しく据つていた。急に立上つて、

「おい、帯を出せ！」

「何処どこへいらつしやる」

「三番町まで行つて来る」

「姉の処？」

「うむ」

「およしなさいよ、危ないから」

「何アに大丈夫だ、人の娘を預つて監督せずに投遣なげやりにしてはおかれん。男がこの東京に来て一緒に歩いたり何かしているのを見ぬ振をしてはおかれん。田川（姉の家の姓）に預けておいても不安心だから、今日、行つて、早かつたら、芳子を家に連れて来る。二階を掃除しておけ」

「家に置くんですか、また……」

「勿論もちろん」

細君は容易に帯と着物とを出そうともせぬので、

「よし、よし、着物を出さんのなら、これで好い」と、白地の単衣ひとえに唐縮緬とうちりめんの汚れたへこ帯、帽子も被かぶらずに、そのままに急いで戸外へ出た。「今出しますから……：……本当に困つて了う」という細君の声が後に聞えた。

夏の日はもう暮れ懸つていた。矢来の酒井の森には鳥からすの聲が喧やかましく聞える。どの家でも夕飯が済んで、門口に若い娘の白い顔も見える。ボールを投げている少年もある。官吏ら

しい鱧髭の紳士が、鹿髪の若い細君を伴れて、神楽坂に散歩に出懸けるのにも幾組か邂逅した。時雄は激昂した心と泥酔した身体とに烈しく漂わされて、四辺に見ゆるものが皆な別の世界のもののように思われた。両側の家も動くよう、地も脚の下に陥るよう、天も頭の上に蔽い冠さるるのように感じた。元からさ程強い酒量でないのに、無闇にぐいぐいと呷ったので、一時に酔が発したのである。ふと露西亞の賤民の酒に酔つて路傍に倒れて寝ているのを思い出した。そしてある友人と露西亞の人間はこれだから豪い、惑溺するなら飽まで惑溺せんければ駄目だと言つたことを思いだした。馬鹿な！ 恋に師弟の別があつて堪るものかと口へ出して言つた。

中根坂を上つて、士官学校の裏門から佐内坂の上まで来た頃は、日はもうとつぷりと暮れた。白地の浴衣がぞろぞろと通る。煙草屋の前に若い細君が出ている。氷屋の暖簾が涼しそうに夕風に靡く。時雄はこの夏の夜景を靡げに眼には見ながら、電信柱に突当つて倒れそうにしたり、浅い溝に落ちて膝頭をついたり、職工体の男に、「酔漢奴！ しつかり歩け！」と罵られたりした。急に自ら思いついたらしく、坂の上から右に折れて、市ヶ谷八幡の境内へと入った。境内には人の影もなく寂寞としていた。大きい古い櫓の樹と松の樹とが蔽い冠さつて、左の隅に珊瑚樹の大きいのが繁つていた。処々の常夜燈

はそろそろ光を放ち始めた。時雄はいかにしても苦しいので、突いきなり如その珊瑚樹の蔭に身を躲かくして、その根本の地上に身を横よこたえた。興奮した心の状態、奔放な情と悲哀の快感とは、極端までその力を発展して、一方痛切に嫉妬しつとの念に駆かられながら、一方冷淡に自己の状態を客観した。

初めて恋するような熱烈な情は無論なかった。盲目にその運命に従うと謂いうよりは、寧むしろ冷かにその運命を批判した。熱い主観の情と冷めたい客観の批判とが絡より合せた糸のようになりに固く結び着けられて、一種異様の心の状態を呈した。

悲しい、実に痛切に悲しい。この悲哀は華はなやかな青春の悲哀でもなく、単に男女の恋の上の悲哀でもなく、人生の最さい奥おうに秘ひそんでいるある大きな悲哀だ。行く水の流、咲く花の凋ちよう落らく、この自然の底わだかまに蟠はかれる抵抗すべからざる力に触れては、人間ほど儂はかない情なさけもないのはない。

汪然おうぜんとして涙は時雄の鬚ひげづら面を伝った。

ふとある事が胸のほに上った。時雄は立上って歩き出した。もう全く夜になった。境内の処々に立てられた硝子燈ガラスとうは光を放って、その表面の常夜燈という三字がはつきり見える。この常夜燈という三字、これを見てかれは胸を衝ついた。この三字をかれは曾かつて深い懊惱おうのう

を以て見たことは無いだろうか。今の細君が大きい桃割に結って、このすぐ下の家に娘で居た時、渠はその微かな琴の音の髣髴をだに得たいと思つてよくこの八幡の高台に登つた。かの女を得なければ寧ろ南洋の植民地に漂泊しようというほどの熱烈な心を抱いて、華表、長い石階、社殿、俳句の懸行燈、この常夜燈の三字にはよく見入つて物を思つたものだ。その下には依然たる家屋、電車の轟こそおりおり寂寞を破つて通るが、その妻の実家の窓には昔と同じように、明かに燈の光が輝いていた。何たる節操なき心ぞ、僅かに八年の年月を閲したばかりであるのに、こうも変ろうとは誰が思おう。その桃割姿を丸鬻姿にして、楽しく暮したその生活がどうしてこういう荒涼たる生活に變つて、どうしてこういう新しい恋を感じるようになったか。時雄は我ながら時の力の恐ろしいのを痛切に胸に覺えた。けれどその胸にある現在の事実は不思議にも何等の動揺をも受けなかつた。

「矛盾でもなんでも為方がない、その矛盾、その無節操、これが事実だから為方がない、事実！ 事実！」

と時雄は胸の中に繰返した。

時雄は堪え難い自然の力の圧迫に圧せられたもののように、再び傍の口ハ台に長い身を

横えた。ふと見ると、赤銅しゃくどうのような色をした光芒ひかりの無い大きな月が、お濠ほりの松の上に音も無く昇つていた。その色、その状かたち、その姿がいかにも侘わびしい。その侘わびしさがその身の今の侘わびしさによく適かなつていると時雄は思つて、また堪え難い哀愁がその胸に漲みなぎり渡つた。酔は既に醒さめた。夜露は置始めた。

土手三番町の家の前に来た。

覗のぞいてみたが、芳子の室に燈火の光が見えぬ。まだ帰つて来ぬとみえる。時雄の胸はまた燃えた。この夜、この暗い夜に恋しい男と二人！ 何をしているか解らぬ。こういう常識を欠いた行為あえを敢てして、神聖なる恋とは何事？ 汚れたる行為の無いのを弁明するとは何事？

すぐ家に入ろうとしたが、まだ本人が帰つておらぬのに上つても為方が無いと思つて、その前を真まっすぐ直すに通り抜けた。女と摩すれちが違たがひう度に、芳子ではないかと顔を覗のぞきつつ歩いた。土手の上、松の木蔭、街道の曲り角、往来の人に怪まるるまで彼方あつちこつち此方こつちを徘徊はいかいした。もう九時、十時に近い。いかに夏の夜であるからと言って、そう遅くまで出歩いてゐる筈はずが無い。もう帰つたに相違ないと思つて、引返して姉の家に行ったが、矢張りまだ帰つていない。

時雄は家に入った。

奥の六畳に通るや否、

「芳さんはどうしました？」

その答より何より、姉は時雄の着物に夥しく泥おびただの着いているのに驚いて、

「まあ、どうしたんです、時雄さん」

明かな洋燈ランブの光で見ると、なるほど、白地の浴衣ゆかたに、肩、膝ひざ、腰の嫌きらいなく、夥おびただしい泥痕ろあと！

「何アに、其処そこでちよつと転んだものだから」

「だつて、肩まで粘っいているじゃありませんか。また、酔ッぱらつたんでしょう」

「何アに……」

と時雄は強しいて笑つてまぎらした。

さて時を移さず、

「芳さん、何処どこに行つたんです」

「今朝、ちよつと中野の方にお友達と散歩に行つて来ると行つて出たきりですがね、もう帰つて来るでしょう。何か用？」

「え、少し……」と言って、「昨日は帰りは遅かったですか」

「いいえ、お友達を新橋に迎えに行くんだって、四時過に出かけて、八時頃に帰って来ましたよ」

時雄の顔を見て、

「どうかしたのですの？」

「何アに……けれどねえ姉さん」と時雄の声は改まった。「実は姉さんにおまかせしておいても、この間の京都のようなことが又あると困るですから、芳子を私の家において、十分監督しようと思うんですがね」

「そう、それは好いいですよ。本当に芳子さんはああいうしつかり者だから、私みたいな無教育のものでは……」

「いや、そういう訳でも無いですがね。余り自由にさせ過ぎても、却かえって当人の為にならんですから、一つ家に置いて、十分監督してみようと思うんです」

「それが好いいですよ。本当に、芳子さんにもね……何処と悪いことのない、発明な、利口な、今の世には珍しい方ですけれど、一つ悪いことがあってね、男の友達と平気で夜歩いたりなんかするんですからね。それさえ止すと好いいんだけれどとよく言うのですの。す

ると芳子さんはまた小母さんの旧弊が始まったって、笑っているんだもの。いつかなども余り男と一緒に歩いたり何かするものだから、角かどの交番でね、不審にしてね、角袖かくそで巡査が家の前に立っていたことがあったと云いますよ。それはそんなことは無いんだから、構いはしませんけどもね……」

「それはいつのことです？」

「去年の暮でしたかね」

「どうもハイカラ過ぎて困る」と時雄は言ったが、時計の針の既に十時半の処を指すのを見て、「それにしてもどうしたんだらう。若い身空で、こう遅くまで一人で出て歩くと言うのは？」

「もう帰つて来ますよ」

「こんなことは幾度もあるんですか」

「いいえ、滅多めったにありませんよ。夏の夜だから、まだ宵の口位に思つて歩いているんですよ」

姉は話しながら裁縫しじこの針を止めぬのである。前に鴨脚いちようの大きい裁物板たちものいたが据えられて、彩絹きぬの裁片たちきれや糸や鋏はさみやが順序なく四面あたりに乱れている。女物の美しい色に、洋燈ランプの光が明

かに照り渡つた。九月中旬の夜は更けて、稍々肌寒く、裏の土手下を甲武の貨物汽車がさまざまいい地響を立てて通る。

下駄の音がする度に、今度こそは！ 今度こそは！ と待渡つたが、十一時が打つて間もなく、小きぎみな、軽い後歯の音が静かな夜を遠く響いて来た。

「今度のこそ、芳子さんですよ」

と姉は言つた。

果してその足音が家の入口の前に留つて、がらがらと格子が開く。

「芳子さん？」

「ええ」

と艶やかな声にする。

玄関から丈の高い 庇 髪の毛の美しい姿がすつと入つて来たが、

「あら、まア、先生！」

と声を立てた。その声には驚愕と当惑の調子が十分に籠っていた。

「大変遅くなって……」と言つて、座敷と居間との間の闕の処に来て、半ば坐つて、ちらりと電光のように時雄の顔色を窺つたが、すぐ紫の袱紗に何か包んだものを出して、黙

つて姉の方に押遣おしやつた。

「何ですか……お土産みやげ? いつもお気の毒ね?」

「いいえ、私も召上るんですもの」

と芳子は快活に言った。そして次の間へ行こうとしたのを、無理に洋燈ラングの明るい眩まぶしい居間の一隅かたすみに坐まらせた。美しい姿、当世流の庇ひさし髪がみ、派手なネルにオリイヴ色の夏帯を形よく緊しめて、少し斜はすに坐まつた艶やかさ。時雄はその姿と相對して、一種状じょうすべからざる満足を胸に感じ、今までの煩悶はんもんと苦痛とを半ば忘れて了つた。有力な敵があつても、その恋人をだに占領すれば、それで心の安まるのは恋する者の常態である。

「大變に遅くなつて了つて……」

いかにも遺瀨やるせないというように微かすかに弁解した。

「中野へ散歩に行つたツて?」

時雄は突如として問うた。

「ええ……」芳子は時雄の顔色をまたちらりと見た。

姉は茶を淹いれる。土産の包を開くと、姉の好きな好きなシユウクリーム。これはマアお旨いしいと姉の声。で、暫しばらく一座はそれに氣を取られた。

少時しばらくしてから、芳子が、

「先生、私の帰るのを待っていて下さったの？」

「ええ、ええ、一時間半位待ったのよ」

と姉あねが傍そばから言った。

で、その話が出て、都合さえよくば今夜からでも——荷物は後からでも好いから——一緒に伴つれて行く積りで来たという話を話した。芳子は下を向いて、點頭うなずいて聞いていた。無論、その胸には一種の圧迫を感じたに相違ないけれど、芳子の心にしては、絶対に信賴して——今回の恋のことにも全心を挙げて同情してくれた師の家に行つて住むことは別に甚はなしい苦痛でも無かつた。寧ろ以前むしからこの昔風むしの家に同居しているのを不快に思つて、出来るならば、初めのように先生の家にと願つていたのであるから、今の場合でなければ、かえつて大おおに喜んだのであらうに……

時雄は一刻も早くその恋人のことを聞き糺ただしたかつた。今、その男は何処どこにいる？ 何時いつ京都に帰るか？ これは時雄に取つては実に重大な問題であつた。けれど何も知らぬ姉の前で、打明けて問う訳にも行かぬので、この夜は露ほどもそのことを口に出さなかつた。一座は平凡な物語に更ふけた。

今夜にもと時雄の言出したのを、だつて、もう十二時だ、明日にした方が宜よかろうとの姉の注意。で、時雄は一人で牛込に帰ろうとしたが、どうも不安心で為方がないような気がしたので、夜の更けたのを口実に、姉の家に泊つて、明朝早く一緒に行くことにした。

芳子は八畳に、時雄は六畳に姉と床を並べて寝た。やがて姉の小さいいびき鼾が聞えた。時計は一時をカンと鳴つた。八畳では寝つかれぬと覚しく、おりおり高い長ためいき大息の氣勢けはいがする。甲武の貨物列車が凄すさまじい地響を立てて、この深夜を独ひとり通る。時雄も久しく眠られなかつた。

五

翌朝時雄は芳子を自宅に伴つた。二人になるより早く、時雄は昨日の消息を知ろうと思つたけれど、芳子が低頭勝うつむきがちに悄しょうぜん然として後について来るのを見ると、何となく可哀かわいそうになつて、胸に苛いらいら々する思を畳みながら、黙して歩いた。

佐内坂を登り了おわると、人通りが少くなつた。時雄はふと振返つて、「それでどうしたの？」と突如として訊たずねた。

「え？」

反問した芳子は顔を曇らせた。

「昨日の話さ、まだ居るのかね」

「今夜の六時の急行で帰ります」

「それじゃ送って行かなくなつてはいけなないぢやないか」

「いいえ、もう好いんですの」

これで話は途絶えて、二人は黙って歩いた。

矢来町の時雄の宅、今まで物置にしておいた二階の三畳と六畳、これを綺麗きれいに掃除して、芳子の住居すまいとした。久しく物置——子供の遊び場にしておいたので、塵埃ちりが山のように積つていたが、箒ほうきをかけ雑巾ぞうきんをかけ、雨のしみの附いた破れた障子を貼り更えると、こうも変わるものかと思われるほど明るくなつて、裏の酒井の墓塋はかの大樹の繁茂しげりが心地みどりよき空翠をその一室みまに漲みなぎらした。隣家の葡萄棚ぶどうだな、打捨てて手を入れようともせぬ庭の雑草の中に美人草の美しく交つて咲いているのも今更に目につく。時雄はさる画家の描いた朝顔あさごの幅を選んで床に懸け、懸花瓶けんかびんには後れ咲おくさきの薔薇ばらの花を挿さした。午ひるご頃に荷物ひるごが着いて、大きな支那靴しなかばん、柳行李やなぎごうり、信玄袋、本箱、机、夜具、これを二階に運ぶのには中々骨が折

れる。時雄はこの手伝いに一日社を休むべく余儀なくされたのである。

机を南の窓の下、本箱をその左に、上に鏡やら紅皿やら罫やらを順序よく並べた。押入の一方には支那鞆、柳行李、更紗の蒲団夜具の一組を他の一方に入れようとした時、女の移香が鼻を撲つたので、時雄は変な気になった。

午後二時頃には一室が一先ず整頓した。

「どうです、此処も居心は悪くないでしょう」時雄は得意そうに笑って、「此処に居て、まあ緩くり勉強するです。本当に實際問題に触れてつまらなく苦労したって為方がないですからねえ」

「え……」と芳子は頭を垂れた。

「後で詳しく聞きましょうが、今の中は二人共じつとして勉強していなくては、為方がないですからね」

「え……」と言つて、芳子は顔を挙げて、「それで先生、私達もそう思つて、今はお互に勉強して、将来に希望を持つて、親の許諾をも得たいと存じておりますの！」

「それが好いです。今、余り騒ぐと、人にも親にも誤解されて了つて、折角の真面目な希望も遂げられなくなりますから」

「ですから、ね、先生、私は一心になって勉強しようと思えますの。田中もそう申しておりました。それから、先生に是非お目にかかつてお礼を申上げなければ濟まないと申しておりますましたけれど……よく申上げてくれッて……」

「いや……」

時雄は芳子の言葉の中に、「私共」と複数を遣うのと、もう公然許嫁の約束でもしたかのように言うのとを不快に思った。まだ、十九か二十の妙齡の処女が、こうした言葉をお口にすることを怪しんだ。時雄は時代の推移おしうつつたのを今更のよう感じた。当世の女学生かたぎ氣質のいかに自分等の恋した時代の処女氣質と異っているかを思った。勿論もちろん、この女学生氣質を時雄は主義の上、趣味の上から喜んで見ていたのは事実である。昔のような教育を受けては、到底今の明治の男子の妻としては立つて行かぬ。女子も立たねばならぬ、意志の力を十分に養わねばならぬとはかれの持論である。この持論をかれは芳子に向つてすくなも慤からず鼓吹した。けれどこの新派のハイカラの実行を見てはさすがに眉まゆをひそめずにはいられなかつた。

男からは国府津こうつづの消印で帰途に就いたという端書はがきが着いて翌日三番町の姉の家から届け

て来た。居間の二階には芳子が居て、呼べば直ぐ返事をして下りて来る。食事には三度三度膳を並べて団欒だんらんして食う。夜は明るい洋燈ランプを取巻いて、賑にぎわしく面白く語り合う。靴下は編んでくれる。美しい笑顔を絶えず見せる。時雄は芳子を全く占領して、とにかく安心もし満足もした。細君も芳子に恋人があるのを知ってから、危険の念、不安の念を全く去った。

芳子は恋人に別れるのが辛つらかった。成ろうことなら一緒に東京に居て、時々顔をも見、言葉をも交えたかった。けれど今の際それは出来難いことを知っていた。二年、三年、男が同志社を卒業するまでは、たまさかの雁かりの音おとずれ信しづをたよりに、一心不乱に勉強しなければならぬと思つた。で、午後からは、以前の如く麴こうじまち町の某英学塾に通い、時雄も小石川の社に通つた。

時雄は夜などおりおり芳子を自分の書齋に呼んで、文学の話、小説の話、それから恋の話をするところがある。そして芳子のためにその将来の注意を与えた。その時の態度は公平で、率直で、同情に富んでいて、決して泥酔して厠かわやに寝たり、地上に横たわつたりした人とは思われない。さればと言つて、時雄はわざとそういう態度にするのではない、女に對むかつている刹那せつな——その愛した女の歡心を得るには、いかなる犠牲も甚だ高価に過ぎなかつ

た。

で、芳子は師を信頼した。時期が来て、父母にこの恋を告ぐる時、旧思想と新思想と衝突するようなことがあつても、この恵深い師の承認を得さえすればそれで沢山だとまで思つた。

九月は十月になつた。さびしい風が裏の森を鳴らして、空の色は深く碧く、日の光は透す通つた空気に射渡つて、夕の影が濃くあたりを隈どるようになつた。取り残した芋の葉に雨は終日降頻つて、八百屋の店には松茸が並べられた。垣の虫の声は露に衰えて、庭の桐の葉も脆くも落ちた。午前の中の一時間、九時より十時までを、ツルゲネーフの小説の解釈、芳子は師のかがやく眼の下に、机に斜に坐つて、「オン、ゼ、イブ」の長い長い物語に耳を傾けた。エレネの感情に烈しく意志の強い性格と、その悲しい悲壮なる末路とは如何にかの女を動かしたか。芳子はエレネの恋物語を自分に引くらべて、その身を小説の中に置いた。恋の運命、恋すべき人に恋する機会がなく、思いも懸けぬ人にその一生を任した運命、実際芳子の当時の心情そのままであつた。須磨の浜で、ゆくりなく受取つた百合の花の一葉の端書、それがこうした運命にならうとは夢にも思い知らなかつたのである。

雨の森、闇の森、月の森に向つて、芳子はさまさまにその事を思った。京都の夜汽車、嵯峨の月、膳所に遊んだ時には湖水に夕日が美しく射渡つて、旅館の中庭に、萩が絵のよ
うに咲乱れていた。その二日の遊は実に夢のようであつたと思つた。続いてまだその人を
恋せぬ前のこと、須磨の海水浴、故郷の山の中の月、病氣にならぬ以前、殊にその時の煩
悶を考えると、頬がおのずから赧くなつた。

空想から空想、その空想はいつか長い手紙となつて京都に行つた。京都からも殆ど隔日
のように厚い厚い封書が届いた。書いても書いても尽くされぬ二人の情——余りその文通
の頻繁なものに時雄は芳子の不在を窺つて、監督という口実の下にその良心を抑えて、こ
つそり机の抽出やら文箱やらをさがした。捜し出した二三通の男の手紙を走り読みに読
んだ。

恋人のするような甘つたるい言葉は到る処に満ちていた。けれど時雄はそれ以上にある
秘密を捜し出そうと苦心した。接吻の痕、性慾の痕が何処かに顕われておりはせぬか。
神聖なる恋以上に二人の間は進歩しておりはせぬか、けれど手紙にも解らぬのは恋のまこ
との消息であつた。

一カ月は過ぎた。

ところが、ある日、時雄は芳子に宛てた一通の端書を受取った。英語で書いてある端書であった。何気なく読むと、一月ほどの生活費は準備して行く、あとは東京で衣食の職業が見附かるかどうかという意味、京都田中としてあつた。時雄は胸を轟かした。平和は一時にして破れた。

晩餐後、芳子はその事を問われたのである。

芳子は困つたという風で、「先生、本当に困つて了つたんですの。田中が東京に出て来ると云うのですもの、私は二度、三度まで止めて遣つたんですけれど、何だか、宗教に従事して、虚偽に生活してることが、今度の動機で、すっかり厭になつて了つたとか何とかで、どうしても東京に出て来るツて言うんですよ」

「東京に来て、何をするつもりなんだ？」

「文学を遣りたいと——」

「文学？ 文学ツて、何だ。小説を書こうと言うのか」

「え、そうでしよう……」

「馬鹿な！」

と時雄は一喝した。

「本当に困って了うんですの」

「貴嬢あなたはそんなことを勧めたんじやないか」

「いいえ」と烈しく首を振って、「私はそんなこと……私は今の場合困るから、せめて同志社だけでも卒業してくれって、この間初めに申して来た時に達たって止めて遣ったんですけれど……もうすっかり独断でそうして了ったんですって。今更取かえしがつかぬようになつて了ったんですって」

「どうして？」

「神戸の信者で、神戸の教会の為に、田中に学資を出してくれている神戸こうづという人があるのです。その人に、田中が宗教は自分には出来ぬから、将来文学で立とうと思う。どうか東京に出してくれと言って遣ったんです。すると大層怒って、それならもう構わぬ、勝手にしろと言われて、すっかり支度をしてしまったんですって、本当に困って了いますの」

「馬鹿な！」

と言ったが、「今一度留めて遣んなさい。小説で立とうなんて思ったって、とても駄目だ、全く空想だ、空想の極端だ。それに、田中が此方こちに出て来ていては、貴嬢の監督上、

私が非常に困る。貴嬢の世話も出来んようになるから、厳きびしく止めて遣なささい！」

芳子は愈 《いよいよ》困ったという風で、「止めてはやりますけれど、手紙が行違いになるかも知れませんから」

「行違い？ それじゃもう来るのか」

時雄は眼を睜みはつた。

「今来た手紙に、もう手紙をよこしてくれても行違いになるからと言ってよこしたんですから」

「今来た手紙ツて、さっきの端書の又後に来たのか」

芳子は点頭うなずいた。

「困ったね。だから若い空想家は駄目だと言うんだ」

平和は再び攪かき乱みださるることとなった。

六

一日置いて今夜の六時に新橋に着くという電報があつた。電報を持って、芳子はまごま

ごしていた。けれど夜ひとり若い女を出して遣る訳に行かぬので、新橋へ迎えに行くことは許さなかつた。

翌日は逢つて達つて諫めてどうしても京都に還らせるように言つて、芳子はその恋人の許を訪うた。その男は停車場前のつるやという旅館に宿つていたのである。

時雄が社から帰つた時には、まだとても帰るまいと思つた芳子が既にその笑顔を玄関にあらわしていた。聞くと田中は既にこうして出て来た以上、どうしても京都には帰らぬとのことだ。で、芳子は殆ど喧嘩をするまでに争つたが、矢張断として可かぬ。先生を頼りにして出京したのではあるが、そう聞けば、なるほど御尤である。監督上都合の悪いというのもよく解りました。けれど今更帰れませぬから、自分で如何ようにしても自活の道を求めて目的地に進むより他はないとまで言つたそうだ。時雄は不快を感じた。

時雄は一時は勝手にしろと思つた。放つておけとも思つた。けれど圈内の一員たるかれにどうして全く風馬牛たることを得ようぞ。芳子はその後二三日訪問した形跡もなく、学校の時間には正確に帰つて来るが、学校に行くと称して恋人の許に寄り合せぬかと思うと、胸は疑惑と嫉妬とに燃えた。

時雄は懊惱した。その心は日に幾遍となく変つた。ある時は全く犠牲になつて二人の

ために尽そうと思つた。ある時はこの一伍一什いちぶしじゅうを国に報じて一挙に破壊して了おうかと思つた。けれどこの何れをも敢あえてすることの出来ぬのが今の心の状態であつた。

細君が、ふと、時雄に耳語じごした。

「あなた、二階では、これよ」と針で着物を縫う真似まねをして、小声で、「きつと……上げ
るんでしよう。紺こんがすり 紺こんがすりの書生羽織！ 白い木綿の長い紐ひもも買つてありますよ」

「本当か？」

「え」

と細君は笑つた。

時雄は笑うどころではなかつた。

芳子が今日は先生少し遅くなりますからと顔を赧あかくして言つた。「彼処あそこに行くのか」と問うと、「いいえ！ 一寸ちよつと友達ともだちの処に用があつて寄つて来ますから」

その夕暮、時雄は思切つて、芳子の恋人の下宿を訪問した。

「まことに、先生にはよう申訳まげがありまえんのやけれど……」長い演説調の雄弁で、形式的の申訳をした後、田中という中ちゆうぜい脊せいの、少し肥えた、色の白い男が祈禱きとうをする時のよ

うな眼色をして、さも同情を求めるように言った。

時雄は熱していた。「然し、君、解つたら、そうしたら好いじゃありませんか、僕は君等の将来を思つて言うのです。芳子は僕の弟子です。僕の責任として、芳子に廃学させるには忍びん。君が東京にどうしてもいると言うなら、芳子を国に帰すか、この関係を父母に打明けて許可を乞うか、二つの中一つを選ばなければならん。君は君の愛する女を君の為に山の中に埋もらせるほどエゴイスチックな人間じゃありませんまい。君は宗教に従事することが今度の事件の為に厭になつたと謂うが、それは一種の考えで、君は忍んで、京都に居りさえすれば、万事円満に、二人の間柄も将来希望があるのですから」

「よう解つております……」

「けれど出来んですか」

「どうも済みませんけど……制服も帽子も売つてしまつたで、今更帰るにも帰れまえないという次第で……」

「それじゃ芳子を国に帰すですか」

かれは黙っている。

「国に言つて遣りましようか」

矢張黙っていた。

「私の東京に参りましたのは、そういうことには寧ろ関係しない積でおます。別段こちらに居りまして、二人の間にはどうという……」

「それは君はそう言うでしょう。けれど、それでは私は監督は出来ん。恋はいつ惑溺するかも知らん」

「私はそないなことは無いつもりですけどナ」

「誓い得るですか」

「静かに、勉強して行かれさえすれアナ、そないなことはありませんけどナ」

「だから困るのです」

こういう会話——要領を得ない会話を繰返して長く相對した。時雄は将来の希望という点、男子の犠牲という点、事件の進行という点からいろいろさまざまに帰国を勧めた。時雄の眼に映じた田中秀夫は、想像したような一箇秀麗な丈夫でもなく天才肌の人とも見えなかつた。麴町三番町通の安旅人宿、三方壁でしきられた暑い室に初めて相對した時、先ずかれの身に迫つたのは、基督教に養われた、いやに取澄ました、年に似合わぬ老成な、厭な不愉快な態度であつた。京都訛の言葉、色の白い顔、やさしいところはいく

らかはあるが、多い青年の中からこうした男を特に選んだ芳子の気が知れなかった。殊に時雄が最も厭に感じたのは、天真流露という率直なところが微塵もなく、自己の罪悪にも弱点にも種々の理由を強いてつけて、これを弁解しようとする形式的態度であった。とは言え、実を言えば、時雄の激しい頭脳には、それがすぐ直覚的に明かに映つたと云うではなく、座敷の隅に置かれた小さい旅靴や憐れにもしておたれた白地の浴衣などを見ると、青年空想の昔が思い出されて、こうした恋の爲め、煩悶もし、懊惱もしているかと思つて、憐憫の情も起らぬではなかつた。

この暑い一室に相對して、趺坐をもかかず、二人は尠くとも一時間以上語つた。話は遂に要領を得なかつた。「先ず今一度考え直して見給え」くらいが最後で、時雄は別れて帰途に就いた。

何だか馬鹿らしいような気がした。愚なる行為をしたように感じられて、自らその身を嘲笑した。心にもないお世辞を言い、自分の胸の底の秘密を蔽う爲めには、二人の恋の温情なる保護者となろうとまで言つたことを思い出した。安翻訳の仕事を周旋して貰う爲め、某氏に紹介の労を執ろうと言つたことをも思い出した。そして自分ながら自分の意気地なく好人物なのを罵つた。

時雄は幾度か考えた。寧ろ国に報知して遣らうか、と。けれどそれを報知するに、どう
 という態度を以てしようかというのが大問題であった。二人の恋の關鍵かぎを自ら握っていると
 信ずるだけそれだけ時雄は責任を重く感じた。その身の不当の嫉妬、不正の恋情の為に、
 その愛する女の熱烈なる恋を犠牲にするには忍びぬと共に、自ら言った「温情なる保護者」
 として、道徳家の如く身を処するにも堪えなかつた。また一方にはこの事が国に知れて芳
 子が父母の為に伴われて帰国するようになるのを恐れた。

芳子が時雄の書齋に来て、頭を垂れ、声を低うして、その希望を述べたのはその翌日の
 夜であつた。如何いかに説いても男は帰らぬ。さりとて国へ報知すれば、父母の許さぬのは知
 れたこと、時宜じぎに由よれば忽たちまち迎むかひに来ぬとも限らぬ。男も折角ああして出て来たことでも
 あり二人の間も世の中の男女の恋のように浅く思い浅く恋した訳でもないから、決して汚
 れた行為などはなく、惑溺するようなことは誓つて為なない。文学は難むずかしい道、小説を書
 いて一家を成そうとするのは田中のようなものには出来ぬかも知れねど、同じく将来を進
 むなら、共に好む道に携たづねたい。どうか暫しばらくこのままにして東京に置いてくれとの頼み。
 時雄はこの余儀なき頼みをすげなく却しりぞけることは出来なかつた。時雄は京都嵯峨さかに於おける
 女の行為にその節操を疑つてはいるが、一方には又その弁解をも信じて、この若い二人の

間にはまだそんなことはあるまいと思つていた。自分の青年の経験に照らしてみても、神聖なる靈の恋は成立つても肉の恋は決してそう容易に実行されるものではない。で、時雄は惑溺せぬものならば、暫くこのままにしておいて好いと言つて、そして縷々として靈の恋愛、肉の恋愛、恋愛と人生との関係、教育ある新しい女の当に守るべきことなどに就いて、切実にかつ真摯に教訓した。古人が女子の節操を誡めたのは社会道德の制裁よりは、寧ろ女子の独立を保護する為であるということ、一度肉を男子に許せば女子の自由が全く破れるということ、西洋の女子はよくこの間の消息を解しているから、男女交際をして都合がないということ、日本の新しい婦人も是非ともそうならなければならぬということなど主なる教訓の題目であつたが、殊に新派の女子ということに就いて痛切に語つた。芳子は低頭いてきいていた。

時雄は興に乗じて、

「そして一体、どうして生活しようというのです？」

「少しは準備もして来たんでしよう、一月位は好いでしょうけれど……」

「何か旨い口でもあると好いけれど」と時雄は言つた。

「実は先生に御継り申して、誰も知つてるものがないのに出て参りましたのですから、大

層失望しましたのですけれど」

「だつて余り突飛だ。一昨日逢つてもそう思ったが、どうもあれでも困るね」

と時雄は笑つた。

「どうか又御心配下さるようにな……この上御心配かけては申訳がありませんけれど」と芳子は継るようになして顔を赧めた。

「心配せん方が好い、どうかなるよ」

芳子が出て行つた後、時雄は急に険しい難かしい顔に成つた。「自分に……自分に、この恋の世話が出来るだろうか」と独りで胸に反問した。「若い鳥は若い鳥でなくては駄目だ。自分等はもうこの若い鳥を引く美しい羽を持っていない」こう思うと、言うに言われぬ寂しさがひしと胸を襲つた。「妻と子——家庭の快樂だと人は言うが、それに何の意味がある。子供の為めに生存している妻は生存の意味があろうが、妻を子に奪われ、子を妻に奪われた夫はどうして寂寞たらざるを得るか」時雄はじつと洋燈を見た。

机の上にはモウパッサンの「死よりも強し」が開かれてあつた。

二三日経つて後、時雄は例刻に社から帰つて火鉢の前に坐ると、細君が小声で、

「今日来てよ」

「誰が」

「二階の……そら芳子さんの好きな人」

細君は笑った。

「そうか……」

「今日一時頃、御免なさいと玄関に来た人があるですから、私が出て見ると、顔の丸い、紺かすりの羽織を着た、白しろしま縞はかまの袴はを穿いた書生さんが居るじゃありませんか。また、原稿でも持つて来た書生さんかと思つたら、横山さんは此方こちらにおいでですかと言うじゃありませんか。はて、不思議だと思つたけれど、名を聞きますと、田中……。はア、それでその人だなと思つたんですよ。厭な人ねえ、あんな人を、あんな書生さんを恋人にしないたツて、いくらも好きのがあるでしょうに。芳子さんは余程物好きね。あれじゃとても望みはありませんよ」

「それでどうした？」

「芳子さんは嬉うれしいんでしょうけど、何だか極きまりが悪そうでしたよ。私がお茶を持つて行って上げると、芳子さんは机の前に坐っている。その前にその人が居て、今まで何か話し

ていたのを急に止して黙ってしまった。私は変だからすぐ下りて来たですがね、……何だか変ね、……今の若い人はよくああいうことが出来てね、私のその頃には男に見られるのすら恥かしくって恥かしくって為方がなかつたものなのですの……」

「時代が違うからナ」

「いくら時代が違つても、余り新派過ぎると思ひましたよ。墮落書生と同じですからね。それやうわべが似ているだけで、心はそんなことはないでしょうけれど、何だか変ですよ」

「そんなことはどうでも好い。それでどうした？」

「お鶴（下女）が行つて上げると言うのに、好いと言って、御自分で出かけて、餅菓子と焼芋を買つて来て、御馳走してよ。……お鶴も笑つていましたよ。お湯をさしに上ると、二人でお旨しそうにおさつを食べているところでしたッて……」

時雄も笑わざるを得なかつた。

細君は猶語り続いた。「そして随分長く高い声で話していましたよ。議論みたいなことも言つて、芳子さんもなかなか負けない様子でした」

「そしていつ帰つた？」

「もう少し以前」

「芳子は居るか」

「いいえ、路みちが分からないから、一緒に其処そこまで送って行って来るツて出懸でけて行つたんですよ」

時雄は顔を曇らせた。

夕飯を食っていると、裏口から芳子が帰つて来た。急いで走つて来たと覺しく、せいせい息を切っている。

「何処どこまで行らした？」

と細君が問うと、

「神楽坂かぐらざかまで」と答えたが、いつもする「おかえりなさいまし」を時雄に向つて言つて、そのままばたばたと二階へ上つた。すぐ下りて来るかと思うに、なかなか下りて来ない。

「芳子さん、芳子さん」と三度ほど細君が呼ぶと、「はアーい」という長い返事が聞えて、矢張りて来ない。お鶴が迎いに行つて漸ようやく二階を下りて来たが、準備した夕飯の膳よを他所そこに、柱はしらに近く、斜はすに坐つた。

「御飯は？」

「もう食べたくないの、腹おなかが一杯で」

「余りおさつを召上った故(せい)でしょう」

「あら、まあ、酷(ひど)い奥(おく)さん。いいわ、奥(おく)さん」

と睨(にら)む真(ま)似(まね)をする。

細君は笑(わ)って、

「芳子(よし)さん、何(なに)だか変(か)ね」

「何(なに)故(ゆ)？」と長(なが)く引(ひ)張(は)る。

「何(なに)故(ゆ)も無(な)いわ」

「いいことよ、奥(おく)さん」

と又(また)睨(にら)んだ。

時雄(ときゆう)は黙(もく)つてこの嬌(きよう)態(たい)に對(たい)していた。胸(むね)の騒(さわ)ぐのは無(む)論(ろん)である。不(ふ)快(かい)の情(じやう)はひしと押(お)し寄(よ)せて來(き)た。芳子(よし)はちらと時雄(ときゆう)の顔(かほ)を覗(のぞ)つたが、その不(ふ)機(き)嫌(けん)な一(ひと)目(め)で解(と)つた。で、すぐ態(たい)度(ど)を改(か)めて、

「先生(せんせい)、今日(けふ)田(た)中(なか)が参(ま)りましてね」

「そうだつてね」

「お目(め)にかかつてお礼(れい)を申(ま)し上(あ)げなければならんのですけれども、又(また)改(か)めて上(あ)がりますから

ツて……よろしく申上げて……」

「そうか」

と言つたが、そのままふいと立つて書齋に入つて了つた。

その恋人が東京に居ては、仮令たとひ自分が芳子をその二階に置いて監督しても、時雄は心を安んずる暇はなかつた。二人の相逢うことを妨げることは絶対に不可能である。手紙は無論差留めることは出来ぬし、「今日ちよつと田中に寄つて参りますから、一時間遅くなりませう」と公然と断つて行くのをどうこう言う訳には行かなかつた。またその男が訪問して来るのを非常に不快に思うけれど、今更それを謝絶することも出来なかつた。時雄はいつの間にか、この二人からその恋に對しての「温情の保護者」として認められて了つた。

時雄は常に苛々いらいらしていた。書かなければならぬ原稿が幾種もある。書肆しよしからも催促される。金も欲ほしい。けれどどうしても筆を執つて文を綴つづるような沈着おちついた心の状態にはなれなかつた。強しいて試みてみるものがあつても、考が纏まとまらない。本を読んでも二頁ペーヅも続けず読む気になれない。二人の恋の温かさを見る度たびに、胸を燃もやして、罪もない細君に当り散らして酒を飲んだ。晚餐ばんさんの菜が氣に入らぬと云つて、御膳おぜんを蹴け飛ばした。夜は十二時過に

酔つて帰つて来ることもあつた。芳子はこの乱暴な不調子な時雄の行為に尠すくなからず心を痛めて、「私がいろいろ御心配を懸けるもんですからね、私が悪いんですよ」と詫わびるように細君に言つた。芳子はなるたけ手紙の往復を人に見せぬようにし、訪問も三度に一度は学校を休んでこつそり行くようにした。時雄はそれに気が附いて一層懊惱の度を増した。野は秋も暮れて木こ枯がらの風が立つた。裏の森の銀杏樹いちょうも黄葉もみぢして夕の空を美しく彩いろどつた。垣根道には反そりかえつた落葉ががさがさと転ころもがつて行く。鴉もずの鳴なき音がけたたましく聞える。若い二人の恋が愈 《いよいよ》人目に余るようになったのはこの頃であつた。時雄は監督上見るに見かねて、芳子を説と勸きめて、この一いち伍ぶ一いち什じゅうを故郷の父母に報せしめた。そして時雄もこの恋に關しての長い手紙を芳子の父に寄せた。この場合にも時雄は芳子の感謝の情を十分に贏かち得るように勉つとめた。時雄は心を欺いて、——悲壯なる犠牲と称して、

この「恋の温情なる保護者」となつた。
備びつちゅう中の山中から数通の手紙が来た。

七

その翌年の一月には、時雄は地理の用事で、上武の境なる利根河畔とねかはんに出張していた。彼は昨年ことの年末からこの地に来ているので、家のこと——芳子ことのことが殊ことに心配になる。さりとして公務を如何いかんともすることが出来なかつた。正月になつて二日にちよつと帰京したが、その時は次男が齒を病んで、妻と芳子とが頻しきりにそれを介抱していた。妻に聞くと、芳子の恋は更に惑わく溺てきの度を加えた様子。大晦日おおみそかの晩に、田中が生活のたつきを得ず、下宿に帰ることも出来ずに、終夜運転の電車に一夜を過したということ、余り頻ひん繁ばんに二人が往来するので、それをそれとなしに注意して芳子と口争いをしたということ、その他種々のことを聞いた。困つたことだと思つた。一晚泊つて再び利根の河畔に戻つた。

今は五日の夜であつた。茫ぼうとした空に月が暈かきを帯びて、その光が川の中央にきらきらと金を砕いていた。時雄は机の上に一通の封書を展ひらいて、深くその事を考えていた。その手紙は今少し前、旅館の下女が置いて行つた芳子の筆である。

先生、

まことに、申訳が御座いません。先生の同情ある御恩は決して一生経たつても忘るることことでなく、今もそのお心を思うと、涙なみだが滴こぼるるのです。

父母はあの通りです。先生があのようように仰おつしやつて下すつても、旧むかし風ふうの頑固かたくなで、

私共の心を汲んでくれようとも致しませず、泣いて訴えましたけれど、許してくれませんか。母の手紙を見れば泣かずにはおられませんけれど、少しは私の心も汲んでくれても好いと思えます。恋とはこう苦しいものかと今つくづく思い当りました。先生、私は決心致しました。聖書にも女は親に離れて夫に従うと御座います通り、私は田中に従おうと存じます。

田中は未だに生活のたつきを得ませず、準備した金は既に尽き、昨年暮れは、うらぶれの悲しい生活を送ったので御座います。私はもう見ているに忍びません。国からの補助を受けませんが、私等は私等二人で出来るまでこの世に生きてみようと思えます。先生に御心配を懸けるのは、まことに済みません。監督上、御心配なさるのも御尤もです。けれど折角先生があのように私等のために国の父母をお説き下さったにも係らず、父母は唯無意味に怒ってばかりいて、取合ってくれませんのは、余りと申せば無慈悲です、勘当されても為方が御座いません。墮落々と申して、殆ど齒せぬばかりに申しておりますが、私達の恋はそんなに不真面目なもので御座いますよ。うか。それに、家の門地々と申しますが、私は恋を父母の都合によって致すような旧式の女でないことは先生もお許し下さるでしょう。

先生、

私は決心致しました。昨日上野図書館で女の見習生が入用だという広告がありましたから、応じてみようと思えます。二人して一生懸命に働きましたら、まさかに餓えるようなことも御座いますまい。先生のお家にこうして居ますればこそ、先生にも奥様にも御心配を懸けて済まぬので御座います。どうか先生、私の決心をお許し下さい。

芳子

先生 おんもとへ

恋の力は遂に二人を深い惑溺の淵に沈めたのである。時雄はもうこうしてはおかれぬと思つた。時雄が芳子の歡心を得る為めに取つた「温情の保護者」としての態度を考えた。備中の父親に寄せた手紙、その手紙には、極力二人の恋を庇保して、どうしてもこの恋を許して貰わねばならぬという主旨であつた。時雄は父母の到底これを承知せぬことを知つていた。寧ろ父母の極力反対することを希望していた。父母は果して極力反対して来た。言うことを聞かぬなら勘当するとまで言つて来た。二人はまさに受くべき恋の報酬を受けた。時雄は芳子の為めに飽まで弁明し、汚れた目的の為めに行われたる恋でないことを言

い、父母の中一人、是非出京してこの問題を解決して貰いたいと言いつつた。けれど故郷の父母は、監督なる時雄がそういう主張であるのと、到底その口から許可することが出来ぬのとで、上京しても無駄であると云つて出て来なかつた。

時雄は今、芳子の手紙に対して考えた。

二人の状態は最早一刻も猶予すべからざるものとなつてゐる。時雄の監督を離れて二人一緒に暮したいという大胆な言葉、その言葉の中には警戒すべき分子の多いのを思つた。いや、既に一步を進めてゐるかも知れぬと思つた。又一面にはこれほどその為めに尽力しているのに、その好意を無にして、こういう決心をするとは義理知らず、情知らず、勝手にするが好いとまで激した。

時雄は胸の轟きを静める為め、月朧なる利根川の堤の上を散歩した。月が暈を帯びた夜は冬ながらやや暖かく、土手下の家々の窓には平和な燈火が静かに輝いていた。川の上には薄い靄が懸つて、おりおり通る船の艫の音がギイと聞える。下流でおいと渡しを呼ぶものがある。舟橋を渡る車の音がとどろに響いてそして又一時静かになる。時雄は土手を歩きながら種々のことを考えた。芳子のことよりは一層痛切に自己の家庭のさびしさということが胸を往来した。三十五六歳の男女の最も味うべき生活の苦痛、事業に対する煩

悩、性慾より起る不満足等が凄じい力でその胸を圧迫した。芳子がかれの為めに平凡な生活の花でもあり又糧でもあった。芳子の美しい力に由つて、荒野の如き胸に花咲き、錆び果てた鐘は再び鳴ろうとした。芳子の為めに、復活の活気は新しく鼓吹された。であるのに再び寂寞荒涼たる以前の平凡なる生活にかえらなければならぬとは……。不平よりも、嫉妬よりも、熱い熱い涙がかれの頬を伝った。

かれは真面目に芳子の恋とその一生とを考えた。二人同棲して後の倦怠、疲労、冷酷を自己の経験に照らしてみた。そして一たび男子に身を任せて後の女子の境遇の憐むべきを思い遣った。自然の最奥に秘める暗黒なる力に対する厭世の情は今彼の胸を簇々として襲った。

真面目なる解決を施さなければならぬという気になった。今までの自分の行為の甚だ不自然で不真面目であるのに思いついた。時雄はその夜、備中の山中にある芳子の父母に寄する手紙を熱心に書いた。芳子の手紙をその中に巻込んで、二人の近況を詳しく記し、最後に、

父たる貴下と師たる小生と当事者たる二人と相對して、此の問題を真面目に議すべき時節到来せりと存候、貴下は父としての主張あるべく、芳子は芳子としての自

由あるべく、小生また師としての意見有^{これあり}之候、御多忙の際には有之候えども、是非
 々々御出京下され度^{たく}、幾重にも希望仕候^{つかまつり}。

と書いて筆を結んだ。封筒に収めて備中国新見町^{にいみまち}横山兵蔵様と書いて、傍に置いて、
 じつとそれを見入った。この一通が運命の手だと思つた。思いきつて婢^{おんな}を呼んで渡した。

一日二日、時雄はその手紙の備中の山中に運ばれて行くさまを想像した。四面山で囲ま
 れた小さな田舎町^{いなかまち}、その中央にある大きな白壁造、そこに郵便脚夫が配達すると、店に
 居た男がそれを奥へ持つて行く。丈^{たけ}の高い、髯^{ひげ}のある主人がそれを読む——運命の力は一
 刻毎に迫つて来た。

八

十日に時雄は東京に歸つた。

その翌日、備中から返事があつて、二三日の中に父親が出発すると報じて来た。

芳子も田中も今の際、寧ろ^{むし}それを希望しているらしく、別にこれと云つて驚いた様子も
 無かつた。

父親が東京に着いて、先ず京橋に宿を取って、牛込の時雄の宅を訪問したのは十六日の午前十一時頃であつた。丁度日曜で、時雄は宅に居た。父親はフロックコートを着て、中高帽を冠つて、長途の旅行に疲れたという風であつた。

芳子はその日医師へ行つていた。三日程前から風邪を引いて、熱が少しあつた。頭痛がすると言つていた。間もなく歸つて来たが、裏口から何の気なしに入ると、細君が、「芳子さん、芳子さん、大変よ、お父さんが来てよ」

「お父さん」

と芳子もさすがにはつとした。

そのまま二階に上つたが下りて来ない。

奥で、「芳子は？」と呼ぶので、細君が下から呼んでみたが返事がない。登つて行つて見ると、芳子は机の上に打伏している。

「芳子さん」

返事が無い。

傍に行つて又呼ぶと、芳子は青い神経性の顔を擡げた。

「奥で呼んでいますよ」

「でもね、奥さん、私はどうして父に逢あわれるでしょう」

泣いているのだ。

「だって、父様に久し振じやありませんか。どうせ逢わないわけには行かんですもの。何アにそんな心配をすることはありませんよ、大丈夫ですよ」

「だって、奥さん」

「本当に大丈夫ですから、しつかりなさいよ、よくあなたの心を父様にお話しなさいよ。本当に大丈夫ですよ」

芳子は遂に父親の前に出た。鬚ひげ多く、威厳のある中に何処どことなく優しいところのある懐なつかしい顔を見ると、芳子は涙の漲みなぎるのを禁とじめ得なかつた。旧式な頑固がんこな爺おやじ、若いものの心などの解らぬ爺、それでもこの父は優しい父であつた。母親は万事に気が附いて、よく面倒を見てくれたけれど、何故か芳子には母よりもこの父の方が好かつた。その身の今の窮迫を訴え、泣いてこの恋の真面目なのを訴えたら父親もよもや動かされぬことはあるまいと思つた。

「芳子、暫しばらくじゃつたのう……体は丈夫かの？」

「お父さま……」芳子は後を言い得なかつた。

「今度来ます時に……」と父親は傍に坐っている時雄に語った。「佐野と御殿場でしたかナ、汽車に故障がありましたナ、二時間ほど待ちました。機関が破裂しましてナ」

「それは……」

「全速力で進行している中に、すさま凄じい音がしたと思いましたが、汽車がおびただ夥しく傾斜してたらだらと逆行しましてナ、何かと思いましたが。機関が破裂して火夫が二人とか即死した……」

「それは危険でしたナ」

「沼津から機関車を持つて来てつけるまで二時間も待ちましたけえ、その間もナ、思いまして……これの為にこうして東京に来て途中、もしもの事があつたら、芳（と今度は娘の方を見て）お前も兄弟に申訳が無かうと思つたじゃわ」

芳子は頭を垂れて黙っていた。

「それは危険でした。それでも別にお怪我もなくつて結構でした」

「え、まあ」

父親と時雄は暫くその機関破裂のことに就いて語り合った。不ふと図、芳子は、
「お父様、家では皆な変ることは御座いませんか？」

「うむ、皆な達者じや」

「母さんも……」

「うむ、今度も私が忙しいけえナ、母に来て貰うように言うてじやつたが、矢張、私の方が好いじやろうと思つて……」

「兄さんも御達者？」

「うむ、あれもこの頃は少し落附いている」

かれこれする中に、午飯ひるめしの膳が出た。芳子は自分の室に戻つた。食事を終つて、茶を飲みながら、時雄は前からのその問題を語り続ついだ。

「で、貴方あなたはどうしても不賛成？」

「賛成しようにもしまいに、まだ問題になりおりませんけえ。今、仮に許して、二人一緒にするに致しても、男が二十二で、同志社の三年生では……」

「それは、そうですが、人物を御覧の上、将来の約束でも……」

「いや、約束などと、そんなことは致しますまい。私は人物を見たわけでありませんけえ、よく知りませんけどナ、女学生の上京の途次を要して途中に泊らせたり、年来の恩ある神戸教会の恩人を一朝にして捨て去つたりするような男ですけえ、とても話にはならぬと思

いますじや。この間、芳から母へよこした手紙に、その男が苦しんでおるじやで、どうか御察し下すって、私の学費を少くしても好いから、早稲田わせだに通う位の金を出してくれと書いてありましたげな、何かそういう計画で芳がだまされておるんではないですかな」

「そんなことは無いでしょうと思うですが……」

「どうも怪しいことがあるです。芳子と約束が出来て、すぐ宗教が厭いやになって文学が好きになったと言うのも可笑おかしし、その後をすぐ追って出て来て、貴方などの御説論も聞かずに、衣食に苦しんでまでもこの東京に居るなども意味がありそうですわい」

「それは恋の惑溺であるかも知れませんが善意に解釈することも出来ませんが」

「それにしても許可するのせぬのとは問題になりませんけえ、結婚の約束は大きなことでして……。それにはその者の身分も調べて、此方こちの身分との釣合も考えなければなりませんし、血統を調べなければなりません。それに人物が第一です。貴方の御覧になるところでは、秀才おつだとか仰おつしやってですが……」

「いや、そう言うわけでも無かったです」

「一体、人物はどういう……」

「それは却かえって母さんなどが御存じだと言うことですが」

「何アに、須磨すまの日曜学校で一二度会ったことがある位、妻もよく知らんそうですけえ。何でも神戸では多少秀才とか何とか言われた男で、芳は女学院に居る頃から知っておるのでしょうがナ。説教や祈祷きとうなどを遣やらせると、大人も及ばぬような巧いことを遣りおったそうですけえ」

「それで話が演説調になるのだ、形式的になるのだ、あの厭な上目を使うのは、祈祷をする時の表情だ」と時雄は心の中に合点がてんした。あの厭な表情で若い女を迷わせるのだなど続いて思つて厭な気がした。

「それにしても、結局はどうしましょう？ 芳子さんを伴つれてお帰りになりますか」

「されば……なるだけは連れて帰りたくないと思ひますがナ。村に娘を伴れて突然帰ると、どうも際立きわだつて面白くありません。私も妻も種々村の慈善事業や名誉職などを遣つておりますけえ、今度のことなどがぱつとしますと、非常に困る場合もあります……。で、私は、貴方の仰おつしやる通り、出来得べくば、男を元の京都に帰して、此処ここ一二年、娘は猶なほお世話になりたいと存じておりますじやが……」

「それが好いですな」

と時雄は言つた。

二人の間柄に就いての談話も一二あった。時雄は京都嵯峨の事情、その以後の経過を話し、二人の間には神聖の靈の恋のみ成立っていて、汚い関係は無いであろうと言った。父親はそれを聴いて點頭きはしたが、「でもまあ、その方の関係もあるものとして見なければなりませんまい」と言った。

父親の胸には今更娘に就いての悔恨の情が多かった。田舎ものの虚栄心のために神戸女学院のような、ハイカラな学校に入れて、その寄宿舎生活を行わせたことや、娘の切なる希望を容れて小説を学ぶべく東京に出したことや、多病の為に言うがままにして余り檢束を加えなかったことや、いろいろなことが簇々と胸に浮んだ。

一時間後にはわざわざ迎いに遣った田中がこの室に来ていた。芳子もその傍に、そは 庇髪ひしがみを俛たれて談話を聞いていた。父親の眼に映じた田中は元より気に入った人物ではなかった。その白縞しろしまの袴はかまを着け、紺がすりの羽織を着た書生姿は、けいべつ 軽蔑の念と憎悪ぞうおの念とをその胸みなぎに漲らしめた。その所有物を奪った憎むべき男という感は、曾かつて時雄がその下宿でこの男を見た時の感と甚だよく似ていた。

田中は袴ひだの襷ひだを正して、しゃんと坐ったまま、多く二尺先位の畳をのみ見ていた。服従という態度よりも反抗という態度が歴々ありありとしていた。どうも少し固くなり過ぎて、芳子

を自分の自由にする或る権利を持つているという風に見えていた。

談話は真面目にかつ烈しかった。父親はその破廉恥を敢て正面から責めはしないが、おりおり苦い皮肉をその言葉の中に交えた。初めは時雄が口を切ったが、中頃から重に父親と田中とが語った。父親は県会議員をした人だけあつて、言葉の抑揚頓挫が中々巧みであつた。演説に慣れた田中も時々沈黙させられた。二人の恋の許可不許可も問題に上つたが、それは今研究すべき題目でないと却けられ、当面の京都帰還問題が論ぜられた。

恋する二人——殊に男に取つては、この分離は甚だ辛いらしかった。男は宗教的資格を全く失つたということ、帰るべく家をも国をも持たぬということ、二三月来飄零の結果漸く東京に前途の光明を認め始めたのに、それを捨てて去るに忍びぬということなどを楯として、頻りに帰国の不可能を主張した。

父親は懇々として説いた。

「今更京都に帰れないという、それは帰れないに違いない。けれど今の場合である。愛する女子ならその女子の為に犠牲になれぬということはあるまいじゃ。京都に帰れないから田舎に帰る。帰れば自分の目的が達せられぬというが、其処を言うのじゃ。其処を犠牲になつても好かろうと言うのじゃ」

田中は黙して下を向いた。容易に諾したくそうにも無い。

先程から黙つて聞いていた時雄は、男が余りに頑固なのに、急に声を励はげまして、「君、僕は先程から聞いていたが、あれほどに言うお父さんの言葉が解らんですか。お父さんは、君の罪をも問わず、破廉恥をも問わず、将来もし縁があつたら、この恋愛を承諾せぬではない。君もまだ年が若い、芳子さんも今修業最中である。だから二人は今暫くこの恋愛問題を未解決の中にそのまうちまにしておいて、そしてその行末を見ようと言うのが解らんですか。今の場合、二人はどうしても一緒には置かれぬ。何方かこの東京を去らなくつてはならん。この東京を去るといふことに就いては、君が先ず去るのが至当だ。何故かと謂いえば、君は芳子の後を追うて来たのだから」

「よう解つております」と田中は答えた。「私が万事悪いのでございますから、私が一番に去らなければなりません。先生は今、この恋愛を承諾して下さいぬではないと仰おつしやつたが、お父様の先程の御言葉では、まだ満足致されぬような訳でして……」

「どういう意味です」

と時雄は反問した。

「本当に約束せぬというのが不満だと言うのですじやろう」と、父親は言葉を入れて、

「けれど、これは先程もよく話した筈はずじゃけえ。今の場合、許可、不許可という事は出来ぬじゃ。独立することも出来ぬ修業中の身で、二人一緒にこの世の中に立って行こうと言やるは、どうも不信用じゃ。だから私は今三四年はお互に勉強するが好いじやと思う。真面目ならば、こうまで言った話は解らんけりやならん。私が一時を瞞まん着ちやくして、芳を他に嫁かたづけるとか言うのやなら、それは不満足じやろう。けれど私は神に誓って言う、先生を前に置いて言う、三年は芳を私から進んで嫁にやるようなことはせんじや。人の世はエホバの思おぼしめし 召めい次第、罪の多い人間はその力ある審判さばきを待つより他に為方しかたが無いけえ、私は芳は君に進ずるとまでは言うことは出来ん。今の心が許さんけえ、今度のことは、神の思召かなに適あつていないと思うけえ。三年経たつて、神の思召めいに適あうかどうか、それは今から予言は出来んが、君の心が、真実真面目で誠実であつたなら、必ず神の思召めいに適あうことと思ふじゃ」

「あれほどお父さんが解つていらつしやる」と時雄は父親の言葉を受けて、「三年、君が為めに待つ。君を信用するに足りる三年の時日を君に与えると言われたのは、実にこの上ない恩恵めぐみでしょう。人の娘を誘惑するような奴やつには真面目に話をする必要がないといつて、このまま芳子をつれて帰られても、君は一言も恨むせきはないのですのに、三年待とう、

君の真心の見えるまでは、芳子を他に嫁けるようなことはすまいと言う。実に恩恵ある言葉だ。許可すると言ったより一層恩義が深い。君はこれが解らんですか」

田中は低頭うづむいて顔をしかめると思ったら、涙がはらはらとその頬ほおを伝った。

一座は水を打ったように静かになった。

田中は溢あふれ出いずる涙を手の拳こぶしで拭ぬぐった。時雄は今ぞ時と、

「どうです、返事を為したま

「私などはどうなつても好うおます。田舎に埋れても構わんどす！」

また涙を拭った。

「それではいかん。そう反抗的に言つたつて為方がない。腹の底を打明けて、互に不満足のないようにしようとする為めのこの会合です。君は達たつて、田舎に帰るのが厭いやだとならば、芳子を国に帰すばかりです」

「二人一緒に東京に居ることは出来んですか？」

「それは出来ん。監督上出来ん。二人の将来の為めにも出来ん」

「それでは田舎に埋れてもようおます！」

「いいえ、私が帰ります」と芳子も涙に声を震わして、「私は女……女です……貴方さえ

成功して下されば、私は田舎に埋れても構やしません、私が帰ります」

一座はまた沈黙に落ちた。

暫くしてから、時雄は調子を改めて、

「それにしても、君はどうして京都に帰れんのです。神戸の恩人に一伍一什を話して、今までの不心得を謝して、同志社に戻ったら好いじゃありませんか。芳子さんが文学志願だから、君も文学家にならんければならんというようなことはない。宗教家として、神学者として、牧師として大に立つたなら好いでしょう」

「宗教家にはもうとてもようなりまへん。人に対つて教を説くような豪い人間ではないでおます。……それに、残念ですのは、三月の間苦勞しまして、実は漸くある親友の世話で、衣食の道が開けましたで、……田舎に埋れるには忍びまへんで」

三人は猶語つた。話は遂に一小段落を告げた。田中は今夜親友に相談して、明日か明後日までに確乎たる返事を齎らそうと言つて、一先ず歸つた。時計はもう午後四時、冬の日
は暮近く、今まで室の一隅に照っていた日影もいつか消えて了つた。

一室は父親と時雄と二人になった。

「どうも煮えきらない男ですわい」と父親はそれとなく言った。

「どうも形式的で、甚だ要領を得んです。もう少し打明けて、ざっくばらんに話してくれると好いですけれど……」

「どうも中国の人間はそうは行かんですけえ、人物が小さくって、小細工で、すぐ人の股またを潜くぐろうとするですわい。関東から東北の人はまるで違うですがナア。悪いのは悪い、好いのは好いと、真情を吐露してうけえ、好いですけどもナ。どうもいかん。小細工こりくつで、小理窟こりくつで、めそめそ泣きおつた……」

「どうもそういうところがありますナ」

「見ていさっしやい、明日きつと快諾しやあせんけえ、何のかのと理窟をつけて、帰るまいとするけえ」

時雄の胸に、ふと二人の關係に就いての疑惑が起つた。男の烈はげしい主張と芳子おのを己が所有とする権利があるような態度とは、時雄にこの疑惑を起さしむるの動機となつたのである。

「で、二人の間の關係をどう御觀察なすつたです」

時雄は父親に問うた。

「そうですね。関係があると思わんけりやなりますまい」

「今の際、確めておく必要があると思うですが、芳子さんに、嵯峨行さがゆきの弁解をさせましようか。今度の恋は嵯峨行の後に始めて感じたことだと言うてましたから、その証拠になる手紙があるでしょうから」

「まあ、其処までせんでも……」

父親は関係を信じつつもその事実となるのを恐れるらしい。

運悪く其処に芳子は茶を運んで来た。

時雄は呼留めて、その証拠になる手紙があるだろう、その身の潔白を証する為めに、その前後の手紙を見せ給えと迫った。

これを聞いた芳子の顔は俄かに赧あかくなつた。さも困つたという風が歴々ありありとして顔と態度あたらとに顯あらわれた。

「あの頃の手紙はこの間皆な焼いて了いましたから」その声は低かつた。

「焼いた？」

「ええ」

芳子は顔を俛たれた。

「焼いた？ そんなことは無いでしょう」

芳子の顔は愈 《いよいよ》あか赧あかくなつた。時雄は激さざるを得なかつた。事實は恐しい力でかれの胸を刺した。

時雄は立つて厠かわやに行つた。胸は苛いらいら々らして、頭あたま脳まは眩げん惑わくするように感じた。欺かれたという念が烈しく心頭を衝ついて起つた。厠を出ると、其処に——障子の外に、芳子はおどおどした様子で立っている。

「先生——本当に、私は焼いて了つたのですから」

「うそをお言いなさい」と、時雄は叱しかるように言つて、障子を烈しく閉めて室内に入つた。

九

父親は夕飯の馳走ちそうになつて旅館に歸つた。時雄のその夜の煩悶はんもんは非常であつた。欺かれたと思うと、業ごうが煮えて為方がない。否、芳子の霊と肉——その全部を一書生に奪われながら、とにかくその恋に就いて真面目まじめに尽したかと思うと腹が立つ。その位なら、——あの男に身を任せていた位なら、何もその処女の節操を尊ぶには当らなかつた。自分も大

胆に手を出して、性慾の満足を買えば好かった。こう思うと、今まで上天の境に置いた美しい芳子は、売女か何ぞのよう思われて、その体は愚か、美しい態度も表情も卑しむ気になった。で、その夜は悶え悶えて殆ど眠られなかった。様々の感情が黒雲のように胸を通った。その胸に手を当てて時雄は考えた。いつそこうしてくれようかと思つた。どうせ、男に身を任せて汚れているのだ。このままこうして、男を京都に帰して、その弱点を利用して、自分の自由にしようかと思つた。と、種々なことが頭脳に浮ぶ。芳子がその二階に泊つて寝ていた時、もし自分がこつそりその二階に登つて行つて、遺瀨なき恋を語つたらどうであろう。危座して自分を諫めるかも知れぬ。声を立てて人を呼ぶかも知れぬ。それとも又せつない自分の情を汲んで犠牲になつてくれるかも知れぬ。さて犠牲になつたとして、翌朝はどうであろう、明かな日光を見ては、さすがに顔を合せるにも忍びぬに相違ない。日長けるまで、朝飯をも食わずに寝ているに相違ない。その時、モウパッサンの「父」という短篇を思い出した。ことに少女が男に身を任せて後烈しく泣いたことの書いてあるのを痛切に感じたが、それを又今思い出した。かと思つと、この暗い想像に抵抗する力が他の一方から出て、盛にそれと争つた。で、煩悶又煩悶、懊惱また懊惱、寝返を幾度となく打つて二時、三時の時計の音をも聞いた。

芳子も煩悶したに相違なかつた。朝起きた時は蒼い顔を為っていた。朝飯をも一椀で止した。なるたけ時雄の顔に逢うのを避けている様子であつた。芳子の煩悶はその秘密を知られたというよりも、それを隠しておいた非を悟つた煩悶であつたらしい。午後になつと出て来たいと言つたが、社へも行かずに家に居た時雄はそれを許さなかつた。一日はかくて過ぎた。田中から何等の返事もなかつた。

芳子は午飯も夕飯も食べたくないと食わない。陰鬱な気が一家に充ちた。細君は夫の機嫌の悪いのと、芳子の煩悶しているのに胸を痛めて、どうしたことかと思つた。昨日の話の模様では、万事円満に収まりそうであつたのに……。細君は一椀なりと召上らなくは、お腹が空いて為方があるまいと、それを侷めに二階へ行つた。時雄はわびしい薄暮を苦い顔をして酒を飲んでいた。やがて細君が下りて来た。どうしていたと時雄は聞くと、薄暗い室に洋燈も点けず、書き懸けた手紙を机に置いて打伏していたとの話。手紙？誰に遣る手紙？時雄は激した。そんな手紙を書いたって駄目だと宣告しようと思つて、足音高く二階に上つた。

「先生、後生ですから」

と祈るような声が聞えた。机の上に打伏したままである。「先生、後生ですから、もう、

少し待つて下さい。手紙に書いて、さし上げますから」

時雄は二階を下りた。暫くして下女は細君に命ぜられて、二階に洋燈ランプを点けに行つたが、下りて来る時、一通の手紙を持つて来て、時雄に渡した。

時雄は渴したる心を以て読んだ。

先生、

私は墮落女学生です。私は先生の御厚意を利用して、先生を欺きました。その罪はいくらお詫わびしても許されませぬほど大きいと思います。先生、どうか弱いものと思つてお憐あわれみ下さい。先生に教えて頂いた新しい明治の女子としての務め、それを私は行つておりませんでした。矢張私は旧派の女、新しい思想を行う勇氣を持つておりませんでした。私は田中に相談しまして、どんなことがあつてもこの事ばかりは人に打明けまい。過ぎたことは為方が無いが、これからは清浄な恋を続けようと約束したのです。けれど、先生、先生の御煩悶が皆な私の至らない為であると思ひますと、じつとしてはいられません。今日は終日そのことで胸を痛めました。どうか先生、この憐れなる女をお憐み下さいまし。先生におすが縋り申すより他、私には道が無いので御座います。

先生 おもと

時雄は今更に地の底にこの身を沈めらるるかと思つた。手紙を持って立上つた。その激した心には、芳子がこの懺悔ざんげを敢てあえした理由——総てすべを打明けて縫ろうとした態度を解釈する余裕が無かつた。二階の階梯はしごをけたたましく踏鳴らして上つて、芳子の打伏している机の傍に厳然として坐つた。

「こうなつては、もう為方がない。私はもうどうすることも出来ぬ。この手紙はあなたに返す、この事に就いては、誓つて何人にも沈黙を守る。とにかく、あなたが師として私を信頼した態度は新しい日本の女として恥しくない。けれどこうなつては、あなたが国に帰るのが至当だ。今夜——これから直ぐ父様の処に行きましょう、そして一伍いちぶ一什しじゅうを話して、早速、国に帰るようにした方が好い」

で、飯を食あいとすぐ、支度をして家を出た。芳子の胸にさまぎまの不服、不平、悲哀あふが溢れたであろうが、しかも時雄の嚴かなる命令おごそに背くわけには行かなかつた。市ヶ谷から電車に乗つた。二人相並んで座を取つたが、しかも一語をも言葉を変えなかつた。山

下門で下りて、京橋の旅館に行くと、父親は都合よく在宅していた。一伍一什——父親は特に怒りもしなかった。唯同行して帰国するのをなるべく避けたいらしかつたが、しかもそれより他に路みちは無かつた。芳子は泣きも笑いもせず、唯、運命の奇くしきに呆あきるるといふ風であつた。時雄は捨てた積りで芳子を自分に任せることは出来ぬかと言つたが、父親は当人が親を捨ててもというならばいざ知らず、普通の状態に於いては無論許そうとは為なかつた。芳子もまた親を捨ててまでも、帰国を拒むほどの決心が附いておらなかつた。で、時雄は芳子を父親に預けて帰宅した。

十

田中は翌朝時雄を訪うた。かれは大勢たいせいの既に定まつたのを知らずに、己の事情の帰国に適せぬことを縷々るるとして説こうとした。靈肉共に許した恋人の例ならいとして、いかようにしても離れまいとするのである。

時雄の顔には得意の色が上のぼつた。

「いや、もうその問題は決着したです。芳子が一伍一什をすっかり話した。君等は僕を欺

いていたということが解った。大変な神聖な恋でしたナ」

田中の顔は俄かに変った。羞恥の念と激昂の情と絶望の悶とがその胸を衝いた。これは言うところを知らなかつた。

「もう、止むを得んです」と時雄は言葉が続いで、「僕はこの恋に関係することが出来ません。いや、もう厭です。芳子を父親の監督に移したです」

男は黙つて坐っていた。蒼いその顔には肉の戦慄が歴々と見えた。不図、急に、辞儀をして、こうしてはいられぬという態度で、此処を出て行つた。

午前十時頃、父親は芳子を伴うて来た。愈々《いよいよ》今夜六時の神戸急行で帰国するので、大体の荷物は後から送つて貰うとして、手廻の物だけ纏めて行こうというのであつた。芳子は自分の二階に上つて、そのまま荷物の整理に取懸つた。

時雄の胸は激してはおつたが、以前よりは軽快であつた。二百余里の山川を隔てて、もうその美しい表情をも見ることが出来なくなると思うと、言うに言われぬ侘しさを感ずるが、その恋せる女を競争者の手から父親の手に移したことは尠くとも愉快であつた。で、時雄は父親と寧ろ快活に種々なる物語に耽つた。父親は田舎の紳士によく見るような書画

道楽、雪舟、応挙、容齋の絵画、山陽、竹田、海屋、茶山の書を愛し、その名幅を無数に蔵していた。話は自らそれに移った。平凡なる書画物語は、この一室に一時栄えた。田中が来て、時雄に逢いたいと言った。八畳と六畳との中じきりを閉めて、八畳で逢った。父親は六畳に居た。芳子は二階の一室に居た。

「御帰国になるんでしょうか」

「え、どうせ、帰るんでしょうか」

「芳さんも一緒に」

「それはそうでしよう」

「何時ですか、お話下されますまいか」

「どうも今の場合、お話することは出来ませんナ」

「それでは一寸でも……芳さんに逢わせて頂く訳には参りますまいか」

「それは駄目でしょう」

「では、お父様は何方へお泊りですか、一寸番地をうかがいたいですが」

「それも僕には教えて好いか悪いか解らんですから」

取附く島がない。田中は黙って暫し坐っていたが、そのまま辞儀をして去った。

昼飯の膳がやがて八畳に並んだ。これがお別れだと云うので、細君は殊に注意して酒肴を揃えた。時雄も別れのしるしに、三人相並んで会食しようとしたのである。けれど芳子はどうしても食べたくないという。細君が説勧めても来ない。時雄は自身二階に上った。

東の窓を一枚明けたばかり、暗い一室には本やら、雑誌やら、着物やら、帯やら、釵やら、行李やら、支那鞆やらが足の踏み度も無い程に散らばっていて、塵埃の香が夥しく鼻を衝く中に、芳子は眼を泣腫して荷物の整理を為っていた。三年前、青春の希望湧くがごとき心を抱いて東京に出て来た時のさまに比べて、何等の悲惨、何等の暗黒であろう。すぐれた作品一つ得ず、こうして田舎に帰る運命かと思うと、堪らなく悲しくならずにはいられまい。

「折角支度したから、食つたらどうです。もう暫くは一緒に飯も食べられんから」

「先生——」

と、芳子は泣出した。

時雄も胸を衝いた。師としての温情と責任とを尽したかと烈しく反省した。かれも泣きたいほど侘しくなった。光線の暗い一室、行李や書籍の散逸せる中に、恋せる女の帰国の

涙、これを慰むる言葉も無かった。

午後三時、車が三台来た。玄関に出した行李、支那鞆、信玄袋を車夫は運んで車に乗せた。芳子は栗梅くりうめの被布ひふを着て、白いリボンを髪かみに挿さして、眼を泣腫なきはらしていた。送つて出た細君の手を堅く握つて、

「奥さん、左様なら……私、またきつと来てよ、きつと来てよ、来ないでおきはしないわ」
「本当にね、又出ていらつしやいよ。一年位したら、きつとね」

と、細君も堅く手を握りかえした。その眼には涙あふが溢あふれた。女心の弱く、同情の念はその小さい胸みなぎに漲り渡つたのである。

冬の日のやや薄寒き牛込の屋敷町、最先まつさきに父親、次に芳子、次に時雄という順序で車は走り出した。細君と下婢なほりとは名残を惜んでその車の後影を見送っていた。その後隣に細君がこの俄にわかの出立を何事かと思つて見ていた。猶その後の小路の曲り角に、茶色の帽子かぶを被つた男が立っていた。芳子は二度、三度まで振返つた。

車こが麴こうじまち町の通を日比谷へ向う時、時雄の胸に、今の女学生ということが浮んだ。前に行く車上の芳子、高い二百三高地巻、白いリボン、やや猫背勝なる姿、こういう形をして、こういう事情の下に、荷物と共に父に伴つれられて帰国する女学生はさぞ多いことであ

ろう。芳子、あの意志の強い芳子でさえこうした運命を得た。教育家の喧しく女子問題を言うのも無理はない。時雄は父親の苦痛と芳子の涙とその身の荒涼たる生活とを思った。路行く人の中にはこの荷物を満載して、父親と中年の男子に保護されて行く花の如き女学生を意味ありげに見送るものもあつた。

京橋の旅館に着いて、荷物を纏め、会計を済ました。この家は三年前、芳子が始めて父に伴れられて出京した時泊つた旅館で、時雄は此処に二人を訪問したことがあつた。三人はその時と今とを胸に比較して感慨多端であつたが、しかも互に避けて面にあらわさなかつた。五時には新橋の停車場に行つて、二等待合室に入つた。

混雑また混雑、群衆また群衆、行く人送る人の心は皆空になつて、天井に響く物音が更に旅客の胸に反響した。悲哀と喜悦と好奇心とが停車場の到る処に巴渦を巻いていた。一刻毎に集り来る人の群、殊に六時の神戸急行は乗客が多く、二等室も時の間に肩摩撃の光景となつた。時雄は二階の壺屋からサンドウィッチを二箱買って芳子に渡した。

切符と入場切符も買った。手荷物もツッキも貰つた。今は時刻を待つばかりである。

この群集の中に、もしや田中の姿が見えはせぬかと三人皆思った。けれどその姿は見えなかつた。

ベルが鳴った。群集はそろそろと改札口に集った。一刻も早く乗込もうとする心が燃えて、焦立いらだつて、その混雑は一通りでなかった。三人はその間を辛うじて抜けて、広いプラットホームに出た。そして最も近い二等室に入った。

後からも続々と旅客が入って来た。長い旅を寝て行こうとする商人もあった。呉くれあたりあたりに帰るらしい軍人の佐官もあった。大阪言葉を露骨に、喋ちやうちやう々と雑話に耽ふける女連もあった。父親は白い毛布を長く敷いて、傍に小さい鞆を置いて、芳子と相並んで腰を掛けた。電気の光が車内に差渡つて、芳子の白い顔がまるで浮彫のように見えた。父親は窓際に来て、幾度も厚意のほどを謝し、後に残ることに就いて、万事を囑しよくした。時雄は茶色の中折帽、七ななこ子の三みつ紋もんの羽織いであちという扮装で、窓際に立尽していた。

発車の時間は刻々に迫つた。時雄は二人のこの旅を思い、芳子の将来のことを思った。その身と芳子とは尽きざる縁えにしがあるように思われる。妻が無ければ、無論自分は芳子を貰つたに相違ない。芳子もまた喜んで自分の妻になつたであろう。理想の生活、文学的の生活、堪え難き創作の煩悶はんもんをも慰めてくれるだろう。今の荒涼たる胸をも救つてくれる事が出来るだろう。「何故、もう少し早く生れなかつたでしょう、私も奥様時分に生れていれば面白かつたでしょうに……」と妻に言つた芳子の言葉を思い出した。この芳子を妻に

するような運命は永久その身に來ぬであろうか。この父親を自分の舅しゅうとと呼ぶような時は來ぬだろうか。人生は長い、運命は奇くしき力を持つている。処女でないということが——一度節操を破つたということが、却かえつて年多く子供ある自分の妻たることを容易ならしむる条件となるかも知れぬ。運命、人生——曾かつて芳子に教えたツルゲネーフの「プニンとバブリン」が時雄の胸に上のぼつた。露西亞ロシアの卓すくれた作家の描いた人生の意味が今更のように胸を撲うつた。

時雄の後に、一群の見送人が居た。その蔭に、柱の傍に、いつ來たか、一箇の古い中折帽を冠つた男が立つていた。芳子はこれを認めて胸を轟とどろかした。父親は不快な感を抱いた。けれど、空想に耽ふけつて立尽した時雄は、その後その男が居るのを夢にも知らなかつた。

車掌は発車の笛を吹いた。

汽車は動き出した。

十一

さびしい生活、荒涼たる生活は再び時雄の家に音おと信しんれた。子供こどもを持てあまして喧やかしく叱しか

る細君の声が耳について、不愉快な感を時雄に与えた。

生活は三年前の旧の轍にかえつたのである。

五日目に、芳子から手紙が来た。いつもの人懐かしい言文一致でなく、礼儀正しい候文で、

「昨夜恙なく帰宅致し候儘御安心被下度、此の度はまことに御忙しき折柄種々御心配ばかり相懸け候うて申訳も無之、幾重にも御託申上候、御前に御高恩をも謝し奉り、御託も致し度候いしが、兎角は胸迫りて最後の会合すら辞み候心、お察し被下度候、新橋にての別離、硝子戸の前に立ち候毎に、茶色の帽子うつり候ようの心地致し、今猶まざまざと御姿見るのに候、山北辺より雪降り候うて、湛井よりの山道十五里、悲しきことのみ思いで、かの一茶が『これがまアつひの住家か雪五尺』の名句痛切に身にしみ申候、父よりいづれ御礼の文奉り度存居候えども今日は町の市日にて手引き難く、乍失礼私より宜敷御礼申上候、まだまだ御目汚し度きこと沢山に有之候えども激しく胸騒ぎ致し候まま今日はこれにて筆擱き申候」と書いてあつた。

時雄は雪の深い十五里の山道と雪に埋れた山中の田舎町とを思い遣つた。別れた後そのままにして置いた二階に上つた。懐かしさ、恋しさの余り、微かに残つたその人の面影

を思しぼうと思つたのである。武蔵野むさしのの寒い風の盛さかんに吹く日で、裏の古樹には潮の鳴るような音が凄すさまじく聞えた。別れた日のように東の窓の雨戸を一枚明けると、光線は流るるように射し込んだ。机、本箱、罫びん、紅べにざら皿、依然として元のままで、恋しい人はいつもの様に学校に行つていゝるのではないかと思われる。時雄は机の抽斗ひきだしを明けてみた。古い油の染みたりボンがその中に捨ててあつた。時雄はそれを取つて匂においを嗅かいだ。暫しばらくして立上つて襖を明けてみた。大きな柳行李が三箇細引で送るばかりに絡からげてあつて、その向うに、芳子が常に用いていた蒲団——萌黄もえぎ唐草の敷蒲団と、線の厚く入つた同じ模様の夜着とが重ねられてあつた。時雄はそれを引出した。女のなつかしい油の匂いと汗のにおいと言いいも知らず時雄の胸をときめかした。夜着の襟えりの天鷲絨びろうどの際きわ立つて汚れているのに顔を押し付けて、心のゆくばかりなつかしい女の匂かいを嗅かいだ。

性慾と悲哀と絶望とが忽たちまち時雄の胸を襲つた。時雄はその蒲団を敷き、夜着をかけ、冷めたい汚れた天鷲絨の襟に顔を埋めて泣いた。

薄暗い一室、戸外には風が吹ふき暴あれていた。

青空文庫情報

底本：「蒲団・重右衛門の最後」新潮文庫、新潮社

1952（昭和27）年3月15日発行

1997（平成9）年5月25日72刷

入力：細浏览弓

校正：細浏览紀子

2003年1月8日作成

2013年3月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蒲団

田山花袋

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>